

深海魚

櫻宮まじゆ

知られてはいけない、
2人の汚れた秘密。

プロローグ

傍から見れば、対照的な2人。

ガヤガヤと賑やかな教室の中で、自分の席に座って、1人で静かに読書をする少女。

彼女は多河真珠。

休憩時間は1人で読書をして過ごすのが、彼女の日常。

髪の毛を耳の下で2つに結び、化粧もしてない、地味な容姿に加え、消極的な性格。

仲の良い友達がおらず、彼女はいつも1人ぼっち。

移動の時も。

昼休みも。

休憩時間も。

登下校の時も。

いつもいつも、1人。

でも彼女は慣れていた。

1人ぼっちで過ごす事に。

一方で.....

「ねえ～、今日、うちらとカラオケ行かない？」

「丁度ね、クーポン券があるんだ～。行こうよ～」

教室の中心で、たくさんの女の子達に囲まれてる少年。

彼は星南蒼汰。

「ごめんね、用事があって行けないんだ.....。せっかく誘ってくれたのに、本当にごめんね」

小さく首を傾げ、申し訳なさそうに言うと、女の子達は頬を赤らめながら「そっか」と言った。

生まれつきの栗色の髪。

芸能人のような、整った顔立ちに、スラッとした高い身長。

当然、彼はモテる。

常に彼の周りには、たくさんの人がいる。

ばっちりメイクをした、今どきの派手めの女の子達ばかりが。

これが彼にとって、当たり前の日常。

周りにたくさんの人がいて、愛想笑いを振りまく事が.....彼の日常。

一見。

対照的で、共通点が1つもなさそうな2人。

でも2人には、誰にも知られてはいけない共通点があった。

そんな2人がいずれ、汚れた秘密を共有するようになる事を、この時はまだ本人達も、周囲の人達も、誰も知らなかった……。

【Episode01】

長い長い、学校での1日がやっと終わった。

「はぁ……」

帰り支度をしながら、ため息を漏らした。

相変わらず教室は賑やかでうるさい。

楽しそうに部活に行く人。

友達と、どこか寄り道しようと話してる人。

とにかくみんな楽しそう。

もう高校2年だというのに……私は青春なんてものを、ちっとも謳歌してない。

生まれながらの、この消極的な性格のせいで友達を作る事ができず、おかげでぼっち状態。

女子はすぐ仲良しグループを作るから……。

人間関係って難しい。

ぼんやりしてる間にも、教室からは、どんどん人がいなくなる。

学校に長居するの、嫌だけど……。

家は、もっと嫌。

そんな事を考えていた時、ポケットに入れて、マナーモードにしてた携帯が震えた。

メールだ。でも見ずに無視した。

差出人は誰か、予想できる。

「はぁ……」

またため息が出て、帰ろうと立ち上がっていた私は再び席に座って、机に突っ伏した。

ふっと、思うんだ。

地球が滅びてくれないかな、とか。

人類が滅亡しちゃえばいいのに、とか。

こんな事考えるなんて、どうかしてる。

でも苦しくてたまらない。

平然と繰り返される毎日が、私は苦しくてたまらない。

いっその事、全部壊れてしまえ、と。

何度心の中で叫んだ事だか……。

しばらく机に突っ伏し続け、周囲が静かになった頃、顔を上げた。

見渡すと、教室に私以外の人はいなかった。

空は夕日で赤くなってる。

大きく伸びをして、何気なくポケットから携帯を取り出した。

私はいまだにガラケー。

「うわっ……メール、20件もきてる……」

差出人はみんな……あいつ。

ストーカーみたいで、気持ち悪っ。

携帯を乱暴に机に置いて、カバンの奥底から、いつも持ち歩いているカッターナイフを取り出した。

ゆっくりゆっくり、カチカチと音を立てながらカッターの刃を出して、左腕の袖をまくり、躊躇する事なく勢いよくカッターで手首を切った。

切り傷からは、ジワジワと血が溢れてきた。

その血を見て、私は笑った。

再び、カッターで手首を切った。

【リストカット】

通称【リスカ】ともいう。

これは単なる癖。

リスカをするのが、私にとっては日常でもあった。

手首を切って、血を流す事で、心の中の苦しい気持ちが軽くなるような気がした。

リスカをしたら心が晴れる。

私はそんな気がしてならない。

そのせいで、私の手首には数えきれないくらい傷跡がある。

だから夏は、黒いリストバンドをして傷を隠してる。

ぼっちの私がリストバンドなんかしても、誰も気にしないし、何も聞いてこないし。

リスカに手を染めたのは、中1の時。

ずっとずっとやめられない。

誰にも知られちゃいけない、秘密……。

私だけの……秘密。

「多河さん……？」

「えっ……」

その声に、驚いて、手に持っていたカッターを落とした。

カッターの落下した音は静かな教室に、うるさく響き渡った。

嘘……どうして……。

「こんな時間まで残って、何してるの？」

一步一步。

こっちに近づいてくる。

困惑を隠しきれない。

どうしよう、見られた。

見られた、見られた。

よりによって……。

「星南、くん……」

クラスの人気者、星南くん。

私と違って、華やかな世界の人。

ぼっちの私には、到底縁のない人だ。

どうして彼がこんな時間まで残ってるのだろうか。

半分パニックになってる間に、真新しい切り傷からはどんどん血が溢れて、ポタッと机の上に落ちた。

ポタポタと。

次から次へと垂れていく血。

慌てて傷を隠すが、もう遅い。

「はい、落としたよ」

気づいた時には、星南くんはすぐ横に立っていて、笑顔で私の前に拾ったカッターを差し出していた。

真新しい切り傷。

刃先に血のついたカッターナイフ。

何をしていたか、一目瞭然だろう。

「あり、がと……」

カッターを受け取って、カバンにしまった。

彼は何故か、ジッと私を見ている。

痛いくらいに凝視してくる。

頼むから、そんなに見ないでよ……。

さっさと帰ってほしいのに。

私は俯いて、彼が帰ってくれるのを待った。

それなのに、

「……はい。血が出てるよ……早く、これで拭きな」

と、ポケットティッシュを私の机に置いた。

「……」

「早く吹きな。血がどんどん机に垂れてるから」

「……」

「……もう」

黙ったまま動かない私を見て痺れを切らしたのか、彼は数枚ティッシュを取り出し、私の左手首を掴んで、切り傷にティッシュを押し当てた。

「あのっ……」

「しばらく、押さえといた方がいいよ」

「っ……」

星南くん、平気なの？

普通は引くでしょ？

リスカした私を見て、気持ち悪いって思ってるでしょ？

「そういや初めてだね、僕らがしゃべるの」

「そ、そうだね……」

「……多河さんって、リスカしてたんだ」

「っ……」

容赦なく、事実を言われた。

私は震えが止まらなくなった。

誰にも知られちゃいけなかったのに。

バレた。よりによって、人気者の彼に……。

「星南くんっ……」

「何？」

「お願い……言わないで……絶対に」

「……」

バラされたら困る。

絶対に知られたくない、誰にも。

リスカは私にとって、苦しい気持ちを晴らす唯一の手段。

お願いだから、自分だけの秘密にさせて。

「多河さん、長い事、リスカやってるでしょ？傷跡が手首にいっぱい……」

少し流れた沈黙の後、彼が放った言葉がコレだった。

淡々と話す彼の顔を恐る恐る見上げた。

……あ。

泣きそうな顔、してる。

どういうわけか、そう思った。

声も切なげに聞こえる。

「おっ、そろそろ血が止まってきたかな」

「あの、この事……誰にも……」

「あー、誰にも言うつもりないけど？言われたら、困るでしょ？」

あっさりと、彼はそう言った。私は安堵した。

「何か、理由があるから、してるんでしょ？それ」

「ま、まあ……」

その理由は、口が裂けても言えないけど。

「あ……多河さん、一応、血は止まったみたいだけど、保健室で包帯もらってこようか？」

「ううん……このままで、平気……」

今、こうして話してみてもわかった気がする。

なんとなく、わかるかも。

彼が人気者のわけ。

こんな私に、嫌な顔1つせず優しくしてくれるんだもの。

「.....ところでさ」

「ん.....？」

「確かに僕、キミがリスカしてる事、内緒にするつもりだけど.....1つだけ条件がある」
条件.....？

何だろう.....。

パシリになれ、とかかな？

次の瞬間、彼の口から飛び出したのは、想像を絶する言葉だった。

「黙ってる代わりに、キミを.....抱かせてほしい」

【Episode02】

一瞬、時間が止まった気がした。

幻聴かと思った。

聞き間違いだ、多分。

ありえない。

この人が、私を……。

「抱くって……それって、あの、まさか……」

「高校生なんだから、わかるよね？率直に言えば、体を1つにさせてほしいって事」

「っ……!!!」

軽く眩暈がした。

何で……。

どうして、よりによって私なの？

「悪いけど、それは絶対に無理。他の人に頼んで。星南くんはモテるから、相手くらい、いくらでもいるでしょ？私じゃなくていいじゃん!!」

つい、怒ったような言い方になった。

とにかく必死だった。

私を抱くなんて、そんなのダメ。

こんな私を抱いたりなんかしたら、星南くんが汚れちゃう。

「だったらバラす。キミがリスカしてる事、みんなにバラすから」

「卑怯者っ……！」

「とにかくっ！キミが抱かせてくれるなら、この事は絶対誰にも言わない」

「っ……」

「だいたい、キミにも少なからず非はあるんじゃない？学校でするなんて……秘密にしてるわりにはツメが甘いね」

そうかもしれないけどっ……。

仕方ないじゃない。

家に帰るの、嫌だったんだから。

「で、どうする？」

「私なんか抱いたって、汚れるだけだよ？メリットなんか、何もないよ」

「メリットなんか求めてない。抱かせてほしいだけだよ……」

ひたすら迷って、頭の中で葛藤し続けて……。

結局、私は「わかった」と頷いてしまった。

リスカしてる事を、誰にもバラされないために。

「……契約、成立ね」

この人は、悪魔だ。

人の弱みにつけ込んで……。

「……星南くんって、実は変態なの？」

「そんなんじゃないから。さ、行くよ」

彼は速やかに、血まみれのティッシュをごみ箱に捨て、私のカバンを持って、私の腕を掴んで席から立たせた。

机に垂れた血は、いつの間にか拭き取られてる。

「行くって、どこにっ……？」

「早速、しよっか」

「なっ、何言ってるの!?急に言われても……」

「……多河さんって、処女？」

「っ……ち、がう……」

信じられない……そういう事、さらりと聞くなんて。

意外とデリカシーのない人なのかな。

そして、「違う」と答えた私も、自分で自分が嫌になった。

手を引かれ、連れ込まれたのは、使用されてない空き教室。

中に入るなり、彼は鍵を閉めた。

「ここでいいよね。学校はまだ閉まらないと思うし」

「えっ……学校で……？」

「他に場所ないじゃん。大丈夫、避妊具は持ってるから」

用意周到だ。

いっつも、こういう事してんのかな……。

「先に言っとくけど、いっつもこういう事してるわけじゃないからね。ほら、早くするよ。裸になっ」

そう言って彼は黙々と制服を脱ぎ始めた。

躊躇せずに、シュルツとネクタイを外し、ブレザーを脱ぎ、ワイシャツを脱ぎ……。

次々と服を脱いで放り投げ、あっという間に彼は生まれたままの姿になった。

彼の裸を直視できず、慌てて背を向けた。

「……多河さんも早く脱いで」

「ひっ……」

彼は私のすぐ後ろに立って、耳元で低く呟いた。

「脱がないなら……脱がしてあげる。1枚1枚、丁寧に、じっくりと……」

「いいですっ……！自分で、やりますっ……」

フツと、星南くんは鼻で笑って、私の前へと移動した。

「ちょっ……」

「僕の目の前で脱いで。目、逸らすのも禁止。ちゃんとかっち、見て？」

弱みを握られた立場なのに、ついドキッとしてしまった。

心の中で葛藤しながらも、ゆっくりとブレザーを脱いだ。

彼がじっくり見てる前で。

私は1枚1枚、脱いだ。

脱いでは、床に投げて、を数度繰り返し、すぐに私も裸になった。

外はすっかり暗くなってる。

しかし不運にも、この日は月が明るく空を照らしていたので、電気を点けていなくても、お互いの姿はしっかり見えた。

「真珠……」

「っ……！」

急に下の名前を呼ばれた。

かと思えば、次の瞬間には、私の体は星南くんの腕の中。

星南くんは私を抱きしめた。

まるで貴重品を扱うかのように、優しく……。

直に触れ合う、肌と肌。

微かに伝わってくる、ドクンドクンという鼓動。

これは……彼の鼓動だ。

本当は星南くんも、緊張してるんだ。

「真珠、真珠っ……」

何度も何度も、繰り返される私の名前。

その声は悲しそうだ。

すぐ目の前にいるはずの星南くんが、今にも消えてしまいそうだ、と思った。

「星南くん……」

彼の背中に腕を回した。

結局、拒絶する事なく、私は彼をそのまますんなり受け入れた。

薄暗い校舎で、彼と1つになった。

抵抗する気は起きなかった。

縋るように「真珠」と連呼する星南くんを、突き放せるわけがなかった。

行為の後は、さっさと服を着て、何事もなかったように、学校を出て、家まで星南くんに送ってもらった。

家に入ろうとしたら、連絡先を聞かれて、私達は互いの連絡先を交換した。

「また明日」と手を振って、星南くんは暗い夜道を引き返していった。

彼の背中を見届け、重い足取りで家に入った。

「ただいま……」

リビングに入ると、テーブルの上には既に夕飯が並んでいた。

「こんな時間まで何してたの？遅くなるなら、連絡くらいしなさい」

ソファーに座っていた母はそう言って、台所へ行きお茶碗にご飯をよそい始めた。

一方の父は、ダイニングテーブルに座って新聞を読んでる。

「早く着替えてきなさい。ご飯にするわよ」

「はい……」

今夜もまた、地獄が始まるんだ……。

嫌だな。

逃げ出してしまいたいや。

ご飯を終え、お風呂に入って。

自室に戻ってすぐに、黒いリストバンドを左腕につけた。

そして1時を過ぎた頃。

ガチャ、と。

部屋のドアがノックもなしに開かれた。

入ってきたのは、父。

「さあ、真珠……今夜も、楽しい時間を過ごそうか」

ベットに座る私を、父はイヤらしく見つめてくる。

全身に鳥肌が立っていく。

……そう。

私には、もう1つ秘密がある。

父に【凌辱】されているという事。

それも毎晩。

「真珠、どうしてメールの返事をくれなかったんだ？たくさん送っただろ？何で無視するんだ、真珠」

執拗なスキンシップ。

汚らしい手で触るな、気安く名前を呼ぶな。

胸の中は激しい嫌悪感でいっぱいになった。

悲しい事に、私の初体験の相手は、他ならぬこいつなんだ。

毎晩、部屋に来ては、嫌がる私を無理矢理……。

母がいるのに。この男はとんだクズだ。

この最低男は、父親だが、血が繋がってるわけではない。

こいつは母の再婚相手。

母が再婚したのは、私が13歳の時。

幼い頃に父は病死。

それ以来ずっと母子家庭で、母は私のために朝から晩まで必死で働いていた。

再婚の話を聞かされた時は嬉しかった。

ずっと苦勞してきた母が、やっと幸せになれる、楽になれる。

心から喜び、祝福した。

当初、父は私や母にとっても優しくしてくれた。

すごく幸せだった。

でも、長くは続かなかった。

私が15歳になった時、それは突然起こった。

夜、部屋で寝ていると、いきなり父が入ってきて、ベッドに侵入してかと思えば、私にキスし、体を執拗に障りだしたのだ。

『なっ、何するのっ……ヤダ!』

当然、拒絶した。

が、次の瞬間、頬に大きな衝撃が走った。

父に殴られた、と理解して啞然とした。

『抵抗すんじゃないねえ。誰のおかげで、一軒家に住めて、毎日飯が食えてると思ってんだ。……

お前、だいぶ綺麗になったな。体が随分、女らしくなった。あいつの体より、お前体の方がタイプだ』

抵抗すれば、殴られた。

そのまま、初体験は呆気なく奪われた。

この日を境に、私は毎晩ずっと凌辱されるようになった。

母もきっと、この事に気づいてる。

だって何度か、母が部屋のドアの隙間から覗き見してるのを見たから。

恐らく声や物音で気づいたんだろう。

でも、気づかないフリをしてる。

母は単に嫌なんだ。離婚するのが。今の暮らしが変わってしまう事が。

専業主婦でいたいから、母は私から目を逸らしてる。決して助けてくれない。

こんな事、誰にも相談できなくて。苦しくて……。

いつしか私はリストカットをする事で、その苦しさを紛らわすようになっていた。

「良い夜だったよ、おやすみ」

地獄の時間がやっと終わって、父は部屋を出て行った。

残された私は、下着や寝間着を身につけず、リストバンドを外して、スクールカバンからカッターを取り出し、勢いよく手首を切った。

ジワッと溢れる血を見て、一筋の涙が目から零れ、同時に……、

『真珠……』

脳裏に過る、私の名を呼ぶ星南くん。

そういえば……。

いままで話した事なかったのに、星南くん、私の下の名前を知ってたんだ……。

今更そんな事気づいて、少々驚きつつ、真新しい切り傷にティッシュを当てて止血した。

明日の晩もまた、地獄が待ってる。

いつまで、屈辱を受け続けなければならないのだろうか.....考えたくもない。

【Episode03】

次の日。

リビングに行くと、父は何事もなかったように、平然と「おはよう」と言ってきた。

母の手前、小さな声で「おはよ」と返した。

学校に登校して、いつも通り、席に座ってカバンから文庫本を取り出した。

1人ぼっちで読書、これがいつも通りの日常.....だった。

読書をしていると、いきなりコンコンと机を叩かれた。

顔を上げると、王子様スマイルをした星南くんが立っていた。

「おはよう」

「.....おはよう」

あいさつだけをして、彼は去って行った。

.....この人も、平然としてる。

でも、初めてだった。彼とあいさつを交わしたのは。

結局この日は、星南くんが話しかけてきたのは、この1回きりだった。

次の日も、そのまた次の日も。

私達はただ「おはよう」や「バイバイ」といったあいさつを交わす程度だった。

あの日の事が、幻だったみたいに思えた。

もしかしたら私は、ただやり捨てられただけなのかも.....。

それならそれで別にいいんだけど.....。

「多河さん、今日、空いてるかな？」

星南くんから誘いを受けたのは、数日後の事だった。

放課後。帰ろうと下駄箱に行って、靴を履き替えて外に出たら、星南くんがいて、そう告げられたのだ。

「予定は、ないけど.....」

「うちに来ない？是非、来てほしいんだ」

「えっ.....!!」

彼の自宅への招待。

驚かないわけがない。

「予定ないなら、いいよね？」

「でも.....迷惑じゃ.....」

「迷惑なら、誘わないし。来てほしいから、誘ってんの。もう、行くよっ！」

「あっ.....」

周りに人がたくさんいるにも関わらず、星南くんは私の手を握って歩き出した。

その光景を見ていた女の子達は口々に「何よ、あの女っ！」とか「ブスのくせに」と、私に対す

る悪口を言っていた。

道中、私達は無言だった。

星南くんは手を握ったまま、スタスタと歩くだけ。

しばらく歩いて到着したのは、テレビでしか見た事ないような、洋風の作りの大きな家。

「入って」

家の中に入って、手を引かれ、2階の突き当りの部屋に案内された。

そこは机とベッドと本棚しかない殺風景な部屋だった。

「ここ、星南くんの部屋？」

「まあ……。くつろいでよ。どうせ今の時間は、他に誰もいないから」

「そ、そう……」

じゃあ、2人きり……。

何の意図で連れて来られたんだろう。

悶々としながら、その場に座った。

「……多河さん、いきなりで申し訳ないんだけど」

「な、何？」

「抱かせてほしい。今すぐに」

心の中で「もしかして」と思っていた予感が見事に的中した。

自意識過剰だが、内心では、そういう目的なのでは……と疑う自分がいたのだ。

「いい、よ」

断る権利はない。仮にも弱みを握られた立場なのだから。

私の返事を聞いてすぐ彼は制服を脱ぎ始めた。私もゆっくり、制服を脱いだ。

お互い裸になったところで、私の体はベッドに押し倒された。

「真珠……」

早速、下の名を呟かれた。

不思議なもんだ。

父に名前を呼ばれると嫌悪感を覚えるのに、星南くんと呼ばれたら……胸の奥がくすぐったくなって、鼓膜が震えるように熱くなる。

「真珠、真珠」

「んっ……」

縋りつくように、執拗に彼は私の体に触れた。

頬、首筋、鎖骨、胸など。

あらゆる箇所をじっくり堪能するかのよう。

そして今度は左手首を触り始めた。

「嫌っ……」

こればかりは、さすがに手を払いのけて拒絶した。

「何で嫌がるの？僕にはもう知られてるんだから、今更拒絶する必要ないよ」

「でも……」

彼はまた、左手首に触れてきた。

切り傷を優しく撫でるように……。

「この傷、新しいね。いつ、切ったの？」

「……昨日だよ」

だって、ほぼ毎日ってくらいしてるもん、リスカ。

「リスカしてなきゃ、生きていけないもの。こうしなきゃ、胸の中の鬱憤が晴らせないの」

彼は「そう」と素っ気なく言い、リスカの傷の上にキスをした。

一度じゃなく、何度も。

そのキスは温かく、妙に心が落ち着いた。

「んっ……真珠っ、もっと力抜いてっ……」

「あっ、んっ……んっ」

「ほら……全部、預けて……真珠はただ、身を任せてればいい……」

「星南くっ……」

行為の最中、私は汗ばむ星南くんの背中に腕を回した。

ポタポタと顔や体に彼の汗が垂れてきた。

行為中、私は星南くんをまじまじと見つめた。

汗ばむ額に火照った頬。

最中の星南くんって、こんな色っぽかったんだ。

前は、戸惑いの方が大きかったから、彼を見つめる余裕がなかった。

こころなしに、星南君の眼差しは優しいんだけど、悲しげにも見えた。

行為の後、私達は並んでベッドに横になっていた。

裸のまま。

「体、平気？」

「全然余裕」

お互い、自然に見つめ合い、微笑み合った。

「でも、どうして今日、急に誘ったの？」

「抱きたかったから……って理由じゃ、ダメかな？」

「ダメじゃないけど……何で今頃？あの日から、結構日にち経ってるし、私てっきりやり捨てされたんだと」

「違う、そんな事はしないよ。ただ……いいのかなって思って。人の弱みに付け込んで、無理矢理抱くなんて……今更ながら、最低な事したかもって思ってただけど……」

ギュッと、彼は私の手を握った。

反射的に私も握り返した。

「やっぱ……我慢、できなかった……。人肌が、恋しくて……」

「……常に、人に触れていたいのか？」

「違うよ。ただ、どうしようもなく人の温もりに触れたいくなる時があるんだ……人肌に、縋りつきたいって言うか……」

「ふーん。その気持ち……ちょっと、わかるかも」

星南くんは「ありがとう」と、笑った。

この人は単に寂しいんだ。

ただ1人が寂しいってわけじゃなくて、事情があるから、どうしようもなく寂しくなって、人肌が恋しくなってしまうんだ。

私は勝手にそう解釈した。

「お風呂、入ろうか。汗でベタついて、気持ち悪いよね」

「これくらい平気だよ……」

「せっかくだから、一緒に入らない？多河さん」

「……うん、じゃあお言葉に甘えて」

多河さん、かあ。

行為が終わったら、もう真珠って呼んでくれないんだ。

何故かそれが、寂しく思えた。

「家の人は、まだ帰って来ないの……？」

2人で、ラベンダーの入浴剤の入った浴槽に浸かりながら、何気なく聞いてみた。

彼は「ん」としか言ってくれなかった。

触れちゃいけない話題なんだ、と理解し、口をつぐんだ。

「綺麗だよ、多河さんの名前」

「へっ？名前？」

何？いきなり。

「しんじゅって書いて、真珠って読むんでしょ？本当に。綺麗だね」

「そうだね」

確かに綺麗だね、名前はね。

「すーごく綺麗な名前だから、印象に残ってたんだ。でもまさか、こんな関係になるとはね」

「それはこっちのセリフ！まさか、星南くんと……」

これは、いわゆるセフレってやつ？

「多河さんが、嫌じゃなかったら……」

「ん……？」

「また、ここに、来てよ……。来てほしい……。暇な時とか」

「暇な時じゃなくても、行くよ。星南くんが呼んでくれたら、いつでも行くから」

口から出たのは、本心だった。

自然と飛び出していた、この言葉が。

嫌じゃなかったんだ。

星南くんを抱かれた事が。

「ありがとう。じゃ、毎日呼んじゃおうかな」

「うん。毎日でも、いいよ……？」

この人を、放っておけない、と思ったんだ。

行為の最中の、悲しそうで今にも壊れてしまいそうな彼を見たら、寄り添っていたい……って。

不思議と、そう思った。

【Episode04】

それからの私達は、頻繁に……。

というより、ほぼ毎日ってくらいに交わる関係になっていた。

学校ではあいさつを交わすだけの関係。

でも放課後は、校内の空き教室、もしくは彼の自宅で、私達は1つになった。

世間でいう【セフレ】という関係に、不思議と嫌だ嫌だという気持ちはなかった。

互いに満足していた。

ただ、縫りつくように、体を寄せ合う関係に。

お互いに、あまり干渉しない、というのも暗黙のルールみたいなものだった。

「1回くらい、ラブホテルに行ってみたいな」

この日もまた。

彼の自宅で体を1つにした。

行為を終え、ベットの上でのんびりしてる最中、何気なくそうしてみた。

「ラブホに憧れてんの？見た目は真面目系なのに、中身は意外と変態なんだー」

「そんなんじゃないってば！ちょーっと興味があっただけ」

むくれながら、ぼんやり天井を見つめながらそう言うと星南くんは「冗談だってば」と笑いながら訂正した。

「でもさ、やればどこでもよくない？それに、もし万が一、ラブホに入ってくところ、誰かに見られたらヤバいし」

彼の言う事は一理あり、私も同意ではあった。

「この関係……バレたら、ヤバいもんね」

そう呟き、目を閉じた。

眠たくなってきちゃった……。

「少し寝る？」

「んー。セックスって、体力使うもんね……」

星南くんは素っ裸の私に毛布をかけてくれた。

トントン、と。

背中を一定のリズムで軽く叩いてくれた。

それが気持ち良くて、すぐに眠りに落ちた。

彼の隣は兎角、居心地がいい……。

数日後、なんとなく予想していた事態がついに起きた。

「あっ……」

下駄箱の上履きに大量の画鋲が入ってる。

おまけに……。

「……はあ」

ブスは引っ込んでろ、と太字ペンで書かれた二つ折りの紙まで入ってる。

誰の仕業か、一目瞭然。星南くんはモテるからね。

画鋏と悪口の紙をごみ箱に捨てて、何事もなかったように、さっさとその場を後にした。

教室に行くと、少し衝撃を受けた。

「うっ……」

私の机と椅子に、白い液体が大量に零れていた。

この匂いは牛乳だ……。明らかに意図的にされたもの。

クスクスと笑い声が聞こえてくる。どこからか、冷たい視線も感じる。

雑巾を持ってきて、ゴシゴシと拭いた。

誰も手伝おうとしてくれない。見て見ぬフリする人や、中には「牛乳くさっ」とか「いい迷惑」と皮肉じみた悪意のある陰口も聞こえてきた。

「……手伝う」

「……!!!」

雑巾を持って颯爽と現れたのは、星南くん。

無言で拭くのを手伝ってくれた。

綺麗に拭き取っても多少匂いが残ったが、手伝ってくれた彼の気持ちは嬉しかった。

しかし嫌がらせは、これで途絶える事はなかった。

靴をごみ箱に捨てられたり、教科書を破かれたり、酷い時にはカバンをトイレの個室に投げ捨てられていた事もあった。

「最近、大丈夫？」

ベットの上で、彼は頻繁に心配してくれた。

そのたびに「あれくらい平気」と返しておいた。

強がってない、平気なのは本心。

父に凌辱されてる事に比べたら、女の子達からの嫌がらせなんて可愛いものだ。

「ところで、真珠」

体を起こし、行為で乱れた私の髪の毛を触った。

「結ぶより、下ろしてる方がいいのに」

「わっ……ちょっと……」

2つに結ばれた髪の毛を、彼は手際よくほどき、手でほぐした。

結んでないと、鬱陶しいんだけどな。

「やっぱこの方がいいな。ちょっと大人っぽくなった気がする」

「じゃあ……星南くんの前では髪、下ろしたままにしようかな」

「そうしてよ……真珠」

恋人を扱うように、彼は私を抱きしめた。

「真珠の体、あったかい」

「……変態」

「変態でいいんだよ。人肌……最高」

首筋を、生暖かい、ザラツとした感触が走った。

「ちょ、舐めないでよ……そんなところ」

「印は、さすがに付けたらヤバいか……」

「ヤバいに決まってるでしょ。印はダメだけど、首筋をべろんべろんに舐めまわすくらいならいいよ」

この日もベットの中で、2人だけの静かな時間を過ごした。

後日。

「あんた、一体星南くんの何？」

連日嫌がらせが絶える事なく続き、とうとう呼び出しをくらった。

昼休みになってすぐ数人の女子が来たと思ったら。

「来て」とだけ言われ、連行。

今はひと気のない校舎裏にいる。

私は壁際に追い込まれ、数人の女子に囲まれている。

「放課後、いつも星南くんと帰ってるでしょ？星南くんはみんなのモノなのに独占するなんて凶々しいんじゃない？」

彼は モノ じゃないけどね。

「ブスは端っこで大人しくしてればいいのよっ！」

「雑草みたいなあんたには苔の生えた日影がお似合いよ」

口々に飛ぶ悪意に満ちた言葉。

言いたい放題、言いまくってる。

反論する事なく、黙ったまま、女子達が去って行くのを待った。

無反応な私を見て更に怒りが募ったのか、

「何とか言いなさいよっ!!この根暗ブス女っ!!」

と暴言と共に頬を叩かれた。

「うちらが何しても、ずーっとシレーっとしてるし、あんたどういう神経してんの!？」

今度は、お腹を足で蹴られた。

その弾みで尻もちをついた。

「いい？もう二度と、星南くんに近づかないでよっ!近づかないって約束しなさいよっ」

「それは無理よ」

即答したら、みんな驚いた顔をした。

でも嘘は言ってない。

私と彼は……契約を結んだようなもんだから。

「なっ、何ですって!!このクソ女っ……」

リーダー格の子が鬼みtainな形相をして、胸倉を掴んできた。

丁度その時、

一カシャ

電子音が聞こえてきた。恐らくシャッターの音だ。

「いじめの証拠現場、ゲット」

「あっ、星南くんっ……!?!」

ヒーローのようなタイミングで現れた星南くんに、女子達は動揺を隠せない様子。

「違うのっ! 私達、ちょっと話してただけで……」

「明らかないじめ行為をしたのに、言い訳して逃げる気?……はっ。最低っ。人類のクズみたいな女だね、キミ達」

容赦ない言葉に、みんながショックを受けてるのが手に取るようにわかった。

「……失せる。あんたら、いつもそばでキャーキャー言って、すっごく鬱陶しいんだよ。そのけばい化粧もちっとも似合っていない。ブスどもが」

みんな泣きそうな顔をしながら、逃げるように、走って去って行った。

やっと嵐が過ぎた。

「大丈夫?」

「うん。ありがとね、星南くん。まるでヒーローみたいだね」

「心配だったから……」

「でもよかったの? ファンの子達に、あんな事言って」

星南くんは笑顔で「うん」と言って、

「ずっと言いたかった事を言えて、胸の奥がスッキリしてるよ」

と、空を見上げながら言った。

清々しい表情をする彼に「よかったね」とだけ言っておいた。

この日を境に嫌がらせはなくなったが。

女子の間で「星南くんは、本当は性格が最悪だ」という噂が瞬く間に広がったのは言うまでもない。

でも彼は気にする様子もなく「好きに噂すればいいよ」と無関心な反応を示していた。

【Episode05】

「あーあ。所詮、女ってのは顔だけで寄ってくる生き物なんだねー」

あの一件から数日。

常に女の子達に囲まれていた彼は、今ではあまり囲まれる事はなくなった。

でも相変わらず「カッコイイ」と目の保養にはされてるみたいだが。

「世の中、顔か。ま、イケメだけにキャーキャー言う子なんて心底どうでもいいけど」

私の隣を歩きながら、彼は非常に清々しそうに言い放った。

この日の放課後も例のごとく、私達は一緒に過ごしているが、今日はいつもと違う。

普段なら、このまま彼の家に直行してセックス。もしくは学校の空き教室でやるかのどちらか。

だが今日は彼の提案でクレープを食べに行く事になった。

「いつもやらせてもらってるんだから、たまにはお礼しなきゃね」

「放課後にクレープって、女子高生の青春って感じするよね」

「意味わかんない。ってか、僕は女子じゃないから」

リスカの事がバレれてからしばらく経つが、慣れてしまった。こうして2人での事に。

「真珠ってさ」

下の名呼びは、2人きりの時のお約束。

「学校で、いつも1人でのいるけど、友達作る気ないの？」

ベンチに座ってクレープを食べながら、さらりと若干デリカシーのない質問をされた。

私は「うーん」と考える仕草をした後、

「そういうわけじゃないけど.....女子の人間関係って、難しくて」

と言っておいた。

「でも真珠って、大人しくてしゃべらない子なのかなって思ってたけど、意外と普通に話せるじゃん」

「まあ、でも私.....あまり積極的じゃないから.....自分から進んで人に話しかけるの得意じゃなくて.....」

人と話すのが得意なわけじゃないのも事実だが。

正直私は、人と関わる気力がなかった。

父に凌辱されて、体を汚されて、初体験を無理矢理奪われた喪失感のせいか、ショックのせいか。

人間関係というものが、非常にどうでもよくなった。

どうせこんな悩み、誰もわかってなんかくれないし.....。

「じゃあ、僕らが仲良くなったのって奇跡？」

「化学反応ってやつじゃないかな？」

人間関係なんてどうでもいいはずなのに、星南くんと一緒にいる事に安らぎを覚えている。

いっその事、家には帰らずに、このままずっと彼と2人でいたいとすら思ったりもした.....。

「結局、今日はやらなかったね。よかったの？星南くん」

「僕がすっごい発情してるみたいな言い方だね。ま、たまにはこんな日があってもいいじゃん」
今日はクレープ食べて、おしゃべりしただけで終わった。

肌を寄せ合うのもいいが、たまにはこういう過ごし方もいいな。

小さく頬を緩ませ、他愛もない話をしながら歩いてるうちに、あっという間に私の家に着いてしまった。

「送ってくれて、ありがとう……」

「ううん、当然の事だから。じゃあ、また明日」

手を振って、別れようとした。

その時。

「……真珠、こんな時間まで寄り道してたのか？」

耳障りな声がした。

声のした方を見ると、父が立っていた。

家の前で、こんなタイミングで遭遇するとか……最悪だ。

「こんな時間まで遊んでちゃダメじゃないか。なるべく真っ直ぐ家に帰りなさい」

父親面して説教じみた事を言う奴を、心底鬱陶しいと思った。

「すみません、こんな時間まで連れ回してしまって……」

彼は作り物の王子様スマイルを浮かべ、そう言いながら頭を下げた。

その光景を不快に感じた。

こんな奴に頭下げなくていいのに……。

「ほら真珠、早く家に入るぞ」

父が私の左手首を掴んだ。

反射的に、隣にいた星南くんの制服の裾を右手で掴んだ。

「真珠……？」

星南くんは不思議そうな顔をしながら私の顔を覗き込んだ。

そして耳元で「走るよ」と言って……。

「えっ……星南くん……!？」

星南くんは私の右手を強く掴んで、走り出した。

後ろで父が「待ちなさいっ！」叫んでるのが聞こえた。

振り向く事なく、私はただ星南くんに引きずられるようにして必死に走った。

唐突な行動に驚いたものの、胸がすうっと軽くなった。

しばらく走ったところで彼は足を止め、私達は乱れた呼吸を整えた。

着いた場所はラブホテルやホストクラブにキャバクラが多く並ぶ、夜の街だった。

歩く人も、派手な格好の女の人や男の人。それに中年のサラリーマン風の男の人。

「大人の、夜の街に来ちゃったね……」

「ごめん……ただ、あの場を離れるのに必死で走ってたから……。意図的にここに来たわけじゃないからね」

ここでは、制服姿の私達はとにかく目立った。周囲を歩く人達は、横目でチラチラこちらを見てる。

そんな中で私達は互いに見つめ合っていた。

時間が止まったみたいに、何も発する事なく、意味もなくジーツと見つめ合った。

「どう、して……いきなり……」

彼がどうして急に私の手を引いて走り出したのか、その理由が知りたかった。

喧騒の中、私のか細い声は微かに彼の耳に届いたようで、切なく微笑みながら……。

「震えてたから……あんな姿見せられたら、さすがに放っておけないよ」

私、震えてたんだ。気づかなかった。

「家に帰るの嫌そうだったし……辛そうな顔してたから、つい……って、真珠っ!？」

星南くんが急に焦り始めた。

その理由は、私が静かに涙を流しているからだ。

静かにスーッと頬に伝う涙。

「ごめんね……迷惑、だったかな？こんな事して」

「……違う、違うよ。ただ……嬉しいから、泣いてるだけ」

「真珠……」

「私を、あの場から連れ出してくれて……嬉しかった……」

涙腺から噴水のように零れる涙。そのせいで上手くしゃべれない。

泣くじゃくる私を、星南くんは抱きしめてくれた。

「ダメ……星南くんの制服に、涙と鼻水がっ……」

「制服なんか、どうでもいい。そんな事、どうでもいいから……今はこうさせて……」

お互い、背中に腕をしっかりと回して、強く抱き合った。

彼の腕の中は温かかった……。

しばらく抱きしめ合って、私達は近くのラブホテルに入った。

一度くらい入ってみたいと思っていた場所だが、部屋は普通のホテルとあまり大差なかった。

「思ったより普通かも……」

「ラブホテルも、ピンからキリまであるからな」

スクールカバンの放り投げて、ベットに大の字になって寝転がった。

「ゴロゴロすんの？」

星南くんは寝転がる私の顔を上から覗き込んだ。

「別に……」

「……ねえ、あの男って父親？」

「一応そうだけど……ただの他人だよ」

「他人って事は……そっか」

なんとなく察してくれたのか、しつこく追及してこようとはしなかった。

法律上では家族なのかもしれない。

でも私は家族なんて認めたくない。あんな奴、ただの他人だ。

「私ね、あいつと仲良くないの」

「なんとなーく、あの場の雰囲気 でわかった」

「あいつが嫌いなの……できる事なら一生顔なんて見たくもない」

「……」

「あのね、星南くん」

もう、いいや。

嫌われたら嫌われたで、その時はその時だ。

「私……」

誰にも言うつもりなんか、なかった。

秘密にしなきゃいけない事だった。

でも……。

「あいつに、毎晩毎晩……凌辱されてるの」

自ら、暴露した。

少し甘えたかったからかもしれない。

星南くんに縋りたくて……もしかしたら、彼なら受け入れてくれるんじゃないかって。

勝手にそう思って、気づいたら口が動いてた。

彼はたいして驚きもせず、ただ一言「そう」と素っ気なく反応したのだった。

【Episode06】

意外と反応が薄かった。

もちろん、大袈裟なリアクションをされても困るけど。

「初体験の相手が、血の繋がらない父親なんて……悲しいよね。初めての相手は、彼氏がよかったなあ」

「……」

「ごめんね？星南くん……私の体はもう、あいつのせいで汚れてるの」

私はもう、汚い。

心も体も汚染されまくってるんだ。

「私なんか抱かせたから……星南くんも、汚れちゃったね。ごめんね……本当に」
手を伸ばし、私を見下ろす彼の頬に手を添えた。

私の手を彼は握った。痛いくらいに。

「だから、抵抗しなかったんだね。僕が抱いた時……」

「そりゃあ……処女じゃなかったからね」

「……真珠」

星南くんは私の体を抱き起して、耳元で「ヤろっか」と呟いた。

「えっ……ええっ!？」

「こころブホテルだし、せっかくだから記念にね」

何の記念……。

唐突な提案に戸惑いながら、制服を脱ぎ始めた彼につられ、私も脱ぎ始めた。

制服を全て脱ぎ、下着姿になったところで「ストップ」と声がかかった。

「今回は下着、僕に脱がせて」

「でも……ブラ、外せるの……？」

「多分、大丈夫だと思う。僕に、リードさせて？」

「わ、わかった……でも、正気なの？あんな話聞いた後で、抱くなんて」

「正気だよ。別に僕、真珠が汚い女だなんて思ってない。むしろ、ちょっと安心してらんだ」
安心……？

「どういう事？」と聞き返すと、彼は自嘲気味に笑って「似たような境遇の人がいてくれたってね」と言った。

何の事か、さっぱりわからず「そっか」としか言わなかった。

ベットの上で、彼は悪戦苦闘する事もなく意図も簡単にブラを外し、下着を素早く脱がせた。

いつもの調子で彼は胸に触れ、敏感な部分に触れた。

「真珠っ……」

縫りつくように触れた後は、そのまま挿れた。

「星南、くっ……星南くんっ……」

私も彼動揺、縋るように名前を呼んだ。
連れ出してくれてありがとう、の意味も込めて何度も彼を求めた。
ラブホテルでの時間は瞬く間に過ぎていった。
挿れ終わった後、彼は再び私の胸に触れ始めた。
すっかり気力を使い果たした私はグッタリして動けなかった。

「……真珠」

「ん？」

「あのさ」

「何？」

「僕も……」

胸に触れ続ける彼を、ポーッと見つめた。
汗でベタベタして、ちょっと気持ち悪いな。
シャワー浴びたい……お風呂に入りたい。星南くんと一緒に……。

「本当は僕の体も、汚れてるんだ……いままでに、何人もの女と寝てきたから」

疲れも、余韻も、何もかも一瞬で吹っ飛んだ。
何を言ってるんだと思った。
冗談だと思って「ははっ」とわざと笑って見せた。
だが彼は真剣な表情を崩さない。

「本当の事だから……嘘じゃない」

「……そう、なんだ」

幻滅したわけじゃない。
ただ、ショックを受けた。
彼に抱かれた女の子は私だけじゃない、と実感した時、胸が切なく、苦しくなった。

「……恋人でもない人を抱くなんて、最低だよね。自分でもそう思うよ。だけど、抑えられなかったんだ。どうしようもない、虚しさや寂しさが……」

星南くんは胸を触るのをやめ、私の隣に寝転がった。

彼の前髪が、汗のせいで額に張り付いてる。

私は素手で彼の額の汗を拭った。

「ねえ、真珠、僕の顔……どう思う？」

「どうって……？」

「綺麗だと、思う？」

「思うよ。すごく綺麗……羨ましいくらいに」

率直な本心だった。別に妬ましいとかは、思っていないけど。

「信じられないかもしれないけど、この顔、本当は整形なんだ」

次々飛び出す暴露は、衝撃的なものばかり。

明らかになっていく彼の……素顔。

「昔の自分は醜かった。鏡を見るのが嫌なくらい、ナイフでズタズタにしてみたいと思ったくらい、自分の醜い顔が本当に大嫌いで憎らしかった……」

最後の方は声が震えてた。

「両親も周りの人達もみんな、僕の顔を見るたびにヒソヒソと噂した。あの顔は醜くて可哀想だとか、あんな顔じゃ幸せになれないとか……言いたい放題だった。でも僕は努力した。ちゃんと好かれるために、周囲に好かれようと、精一杯努力したよっ!!それなのにつ……」

彼はベットを思い切り叩いた。

……泣いてるの？

「誰も……僕なんか、好きになってくれなかった……あっち行け、とか……醜い顔をこっちに向けるなって……いつも追いやられてばかりで……。好いてくれる人なんか、誰1人いなかった……」

今の彼からは、想像もできない過去。

隠されていた、思わぬ闇。

「中学2年生の時だった……転機が訪れたのは。両親が交通事故で亡くなったんだ。居眠り運転のトラックに衝突して即死。それで、僕に残されたのは……多額の保険金」

まさか……その保険金を……。

私の予想は見事的中。

「その保険金で、顔を整形したんだ。おさらばしたかった、一生付き合っていくなんて死んでも嫌だった。顔を変える事に1ミリも抵抗なんかなかったよ。整形して顔が綺麗になってからは、すっごく清々しかった。おまけに両親が死んで、親戚のおばさんに引き取られる事になった僕は違う中学に転校する事になって……見事、過去の自分から決別できたんだ」

話を聞いて、自分がちっぽけに思えた。

彼が抱えてた闇に比べたら、私が抱えるものなんて……ちっぽけでくだらない。

「新しい学校では、みんな僕を慕ってくれた。不思議だね、顔が良いってだけで女子がわんさか寄ってくるんだから。誰にも醜いって言われなくなって嬉しかった、最初のうちは。徐々に虚しさを感じるようになっていったんだ。醜かった頃は、どんなにがんばっても好いてもらえなかった。なのに、顔が綺麗になったら好かれる努力をしなくても人が寄ってくる……人は顔じゃないって言うけど、結局世の中顔なんだよ。中身が良からうが悪からうが、重視されるのは顔なんだ……醜い奴は、内面すら見てもらえない……」

星南くんが、泣いてた。

涙を流しながら、薄笑いを浮かべてる。

「……泣かないで」

私は、わかってあげられない。

わかってあげたくても、所詮これは体験した本人にしかわからない気持ち。

今の私がしてあげられるのは……。

静かに涙を拭い、壊れそうな彼に寄り添う事くらい……。

「でも……顔を整形した事で、大きな代償もあったけどね……」

「代償……？」

「うん……両親の保険金、整形の費用に全額使ったんだ。僕を引き取ったおばさんは、当然激怒。おかげで家には居場所なんてないよ。高校を卒業したらすぐ出て行けてセリフを耳にタコができるくらい聞かされてる。そもそもおばさんが僕を引き取ったのは、両親の保険金が目当てだったみたいだしね。おじさんもおばさんも、僕の顔を見るのが嫌みたいで、ほとんど家にいる事がないんだ。出かけて、帰ってくるのはいつも夜」

今になって、やっとわかった。

人肌が恋しいと言ってた理由が……。

彼が行為の時、あんなに、縋りつくようにしてたのは……。

「あんな広い家にいつも1人……学校には、顔だけで寄ってくる子達ばかり……な一んか虚しくて、悲しくて、無性に寂しくて……寂しさを紛らわすために、女の人と寝るようになったんだ。繁華街を歩いて、大学生と偽って派手な女をナンパしてラブホに行ってやるってのを、高校1年の時からやってたんだ」

暴露される話は、私にとっては衝撃だった。

学校ではいつもみんなの王子様だった彼。

でもその仮面の下では……いつも、泣いてたんだ。

「ただ単に寂しくて、誰かに寄り添ってもらいたかった。でも、いくら女と寝ても……虚しさは消えなかった。それで、思ったんだ。どうせ寄り添ってもらうなら、何事もなく平然と、悠々と育ってきた女よりも自分と同じように、傷を抱えた子がいいって……」

やっと、真相がわかった。

何故あの日、彼が私に抱かせてほしいと言ったのか。

こんな地味でリスクなんかしてる私をセフレにした理由が、ようやくわかった。

私が選ばれた理由は単に……。

「リスクしてるのを見て……私にしたんだね」

最初からわかってたけどね。

私自身に興味があったわけじゃないって事くらいは。

「キミには前から目をつけていたんだ。夏になったら、いつも黒いリストバンドしてたのがずっと気になってて」

かなり意外だった。

まさか、リストバンドしてる事を気にかけてる人がいたなんて。

「リスカしてる現場見たあの日、この子がいいって思って……。本当、勝手だよね。寂しさを紛らわすために、面識のなかった、ただのクラスメイトを利用するなんて」

利用、と聞いてズキンと痛む胸。

更にはただのクラスメイトときっぱり言われ、少し突き放された気分になった。

【Episode07】

「最低なんかじゃない……馬鹿」

頭が良いわけじゃないから。

気の利いた事なんか言えない。

こんな時、私にかけてあげられる言葉は……。

「星南くんは違うかもしれないけど……でも私は、2人で過ごす時間が……好きだよ。最初のうちは、ちょっと戸惑ってたけど……」

自分の本心を、ストレートにぶつける事。

上手には言えないけど。

「でも私……利用されて、よかったと思う……。こんな私が、ちょっとでも人の役に立てたなら、少しでも心に寄り添ってあげられてたなら……それだけで本望だよ」

そう言って微笑みかけると、星南くんは嗚咽しながら泣きじゃくった。

良い事なんか1つも言っていないのに……。

「あ、ありがとっ……正直、真珠に……少し、甘え過ぎたかなって……思ってた、から」

「そんな事ないよっ！これからも、どんどん甘えてよっ……！」

少し、必死になってそう言う私に「うん、甘える」と彼は素直に応じた。

気付けば、いつの間にやら私も泣いてた。

頬に涙が伝っていた。

この涙は、何なのか。

彼に同情したのか、自分と少し重ね合わせてしまったからなのか。

涙の理由は自分でも知る由がなかった。

ただ1つ確かなのは、私達は決して想い合ってるわけではないという事。

彼が私を抱くのは、寂しさや辛かった出来事を紛らわすため。

単に自分と同じ、幸せではない子に寄り添ってほしいだけ。

そして私も……彼とベットの上で過ごす事で、父に無理矢理犯されるという辛い現実から逃避した。

私達はただ、体を重ね合わせて、現実逃避してるだけなんだ。

そういう関係って、なんだか少し……残酷で、辛い。

「……実は、まだカミングアウトする事があるんだ」

思い出したように、彼はそう言った。

暴露する事が、まだあるの……？

ここまでくると、聞くのが少々怖く感じられた。

でも、せっかく打ち明けてくれるんだ。

逃げずに、ちゃんと聞かなきゃ。

「真珠、キミと僕にはとても悲しい共通点があるんだ。それが何か、わかる？」

「わかるわけないよ。私、エスパーじゃないもん……」

良い話じゃない。

また、彼の抱える闇の話だ。

「実は僕……」

前置きするように、彼は黙った。

少々沈黙した後に放たれたのは、衝撃的な一言。

「おじさんに、何度かレイプされた事あるんだ」

頭を鈍器で殴られたような衝撃が走った。

言葉を失った。声が出なかった。

レイプって事は……つまり……。

「おじさんは、異常な性癖がある人でね。僕の綺麗な顔が、まさに自分の好みだ、なんて意味わかんない事言ってきて……真夜中に、犯された。15歳の時に」

胸が苦しくなっていく。

お腹の辺りがムカムカしてきた。

「僕の初体験の相手は同性、しかも親戚のおじさんだよ？ほんと、最悪……」

いままでずっと知らなかった。

こんな共通点があった事に。

気持ちが悪くなって、トイレに駆け込んだ。

ドアも閉めずに、便器の前にしゃがみ込んで、胃の中の物を吐き出した。

「ゲホッ、ゲホッ……」

次々に便器の中に嘔吐して、しまいには胃液しか出なくなった。

「悲しくて、悲惨な共通点だね」

星南くんはトイレに入ってきて、全開だったドアを閉めた。

慌てて、トイレの水を流した。

「僕もキミも、初体験の相手は身内。おまけに無理矢理強奪された……悲惨だね、お互い」

「……」

「まさか、吐く程、さっきの話にショックを受けるなんて。ごめん、不快な思いさせて」

「う、ううん……大丈夫、だよ」

彼の傷に比べたら、私の傷なんかごみ程度だ。

支えられるように立ち上がり、腕を引かれ、ベットへ連れ戻された。

ベットに並んで座って、私は手を膝の上で握り締めたまま俯き続けた。

「真珠」

先に口を開いたのは星南くん。

「僕の事、気持ち悪いって思ったでしょ？これを機に、やめちゃう？こんな関係」

「それは嫌っ……！」

私が強い口調でそう言ったので、星南くんは目を見開いて驚いていた。

「気持ち悪いなんて、思うわけないよ……。ただ、話を聞いて……。自分の悩みが、すごく……。ちっぽけに感じて……」

真剣な話をしてるのに、彼は「ははっ」と笑った。

「悩みに、スケールなんて関係ないよ。人が抱える悩みは、人それぞれ。他人にとってはどうでもいい事でも、その人にとっては大きな悩み事だって場合もあるでしょ？とにかく、気持ち悪がられてなくて、ちょっと安心した」

軽く笑う彼に、少し胸が熱くなった。

「不謹慎だけど、私はこれからもこの関係……。続けていきたい、とは思ってるから」

自分で言って恥ずかしくなった。

まるで性欲に飢えたビッチみたいじゃん。

でも彼は引く様子もなく、むしろホッとしてるようにも見えた。

「それは、どうも。さて……。辛気くさい話はやめにして、お風呂に入ろうか。準備するね」

「うん……」

ちょっと暗い雰囲気になったけれど。

彼の新たな一面を知れた。

彼が自ら、素顔を晒してくれた……。

「真珠……」

バスルームに向かおうとしてた星南くんが、いきなり足を止めて振り返った。

「何？」と首を傾げると彼は照れくさそうに、

「僕も、ちょっと、好きだから。真珠との、時間……」

と言って、逃げるようにバスルームに駆け込んでいった。

しばらく硬直状態だった私は、すぐに全身が熱くなっていくのを感じた。

「なんか、熱い……」

パタパタと両手で顔を仰いだ。

体だけの関係だとわかっているのに。

星南くん胸がドキドキして、ときめいてるのも……。事実。

所詮は【セフレ】

それ以上でも、それ以下でもないんだ……。

【Episode08】

2人でお風呂に入って、少しのんびりしてラブホテルを後にした。

「家に帰るの、本当に平気？」

「大丈夫。星南さんと一緒に時間を過ごして、元気出たから」

何故か胸が晴々していた。

誰にも言えなかった悩みを、カミングアウトできたおかげかな。

「僕も、元気出たよ。真珠に話聞いてもらえて、胸がスッキリした」

星南くんも私と同じ気持ちみたい。

私達はしっかりと手を繋いだ。

恋人同士でもなくせに、ちゃっかり恋人繋ぎで。

家に着いて、

「一応、ご両親にあいさつさせて」

と言い、星南くんはチャイムを鳴らした。

すぐに玄関のドアが開き、血相変えた母が出てきた。

その後ろには父もいる……。

「真珠っ……こんな時間までどこにっ……」

「すみません。僕が真珠さんを連れ回してしまって……本当に、すみませんでした」
謝罪を述べ頭を下げる彼に、母は戸惑い、父は冷たい目で睨みつけていた。

「あ、ありがとね。真珠を送ってくれて。もう遅いから、あなたも早く帰りなさい」
母は早口でそう言って、私の手を引っ張り家の中へ。

咄嗟に後ろを振り向くと、星南くんが心配そうな表情をした。

私は 大丈夫 の意味を込めて小さく笑った。

ボタン、と。

母の手によって乱暴に玄関のドアが閉められた。

「さっさと上がりなさい……」

父は冷たい口調でそう言い、リビングへ。

靴を脱いで、私は母に軽く背を抑えながらリビングに入った。

「真珠っ！こんな時間まで男の子と一緒にいたの!?あの子と何してたのっ!!」

頭ごなしに、母は怒鳴った。

父はソファーに座って新聞を読み始めた。

「全く……私はあなたを、そんなふしだらな子に育てた覚えはないわよ？」
酷く腹が立った。

私が父に凌辱される事、知ってるくせに……よくそんな事言えるね。

「だいたい、こんな時間まで女の子を連れ回すなんて……あの子はろくな男じゃないわね」
何を……言うの？

何も知らない人が、好き勝手に……。

「真珠、もうあの男とは仲良くするな」

父の言葉に母は「そうよ」と便乗した。

「あんな子とはもう付き合っちゃダメよ。ふしだらな子に、なりたくないでしょ？」

胸に溜まっていく、ドロドロした気持ち。

感情が抑えきれなくて、我慢は無理だった。

「うるさいなっ!!何も知らないくせに、勝手な事言うなっ!!」

私が怒鳴ると、2人とも驚いた顔をした。

無理もない。

私がこんな風に、親に怒鳴った事なんか一度もなかったから。

「星南くんを悪く言わないでっ……星南くんの事、何も知らない人が……偉そうに言わないでっ!」

初めて親に反抗した。

父も母も、黙ったまま。

「私、絶対にやめないから……どんなに反対されても、星南くんと付き合いだけはやめない。もう私には、あの子がいなきゃダメだから」

恋人じゃなくても。

今の私には、星南くんだけなんだ。

必要としてくれるのは彼だけ。

彼だけが……私の支えなんだ。

「今後一切、私と星南くんの事に口出ししてこないで」

そう言い捨てて、リビングを出た。

バタンツと、わざとドアを乱暴に閉めた。

中からはすぐに2人の話し声が聞こえてきた。

「もうっ……何なのよっ!何であの子は、あんな可愛げのない子になったの!?いつも不愛想で…
…きつと私の育て方が悪かったのよ」

「お前のせいじゃないだろ」

「これから、あの子にどう接したらいいのよ……どうすればいいのよ……」

「お前が悩む事じゃないだろ。もう放っておけばいいだろ。何かあったら、どうせ困るのはあいつなんだ。俺達には関係ない」

これ以上、聞きたくない。

両手で耳を塞いで走って2階の階段を駆け上がった。

自室に入ってすぐ、急いでスクールカバンからカッターを出した。

乱暴に左腕の袖を捲って、カッターの刃を出して、腕を勢い良く切った。

少々深く切り過ぎたようで、いつもより多く出血した。

パッキリ開いた傷。

そこから大量に溢れる血。

ポタポタとどンドン床に垂れていく。

「あっ……」

カッターを放り投げ、右手で傷を押さえた。

血は止まらない。

右手はあっという間に血で汚れた。

「っ……うっ……」

目に溜まった涙はすぐに頬を伝い、流れていく。

血も涙も、止まらない。

「星南、くんっ……」

さっきまで、一緒にいたのに。

会いたい。

どうしようもなく、星南くんに会いたい……。

～♪♪

携帯が鳴った。

血の付いた手でカバンの中から携帯を取った。

星南くんからメールが届いていた。

メールの内容は「大丈夫？」というシンプルな文面だけ。

「っ……星南くんっ」

たったこれだけのメールだけど、胸の苦しさは和らいだ。

血だらけの手で携帯を握り締めて、しばらく声を殺して泣き続けた。

「……やっぱ、酷い顔」

次の日の朝。

散々泣いたせいで、目が腫れてた。

洗面所の鏡の前でため息をついて、スクールカバンを肩にかけて家を出た。

まだ時間は早いけど……家にいたくない。

父と母とも今は顔を合わせたくない。

家を出て、私は予想外の事に遭遇した。

「え……何で」

「おはよう。結構早いね」

家の前に、星南くんがいた。

こんな早い時間に、何で……？

「真珠に会いたくて、出てくるの、ここで待ってたんだ。でもこんな早く出てくるなんて思わなかった」

「星南くん……」

「昨日、心配だったから。何事も、なかったかどうか……。メールも返事なかったし」

すごい奇遇。

私も会いたかった。

すっごく……会いたかった。

「星南くんっ……」

甘えん坊の子供のように、星南くんに抱き着いた。

温かい……安心する……。

「甘えたさんだね。よしよし」

彼の腕が背中に回り、温もりに包まれた。

ここ、私の家の前だけど。

ちらほらと、人も通るけど。

でも今はしばらくこのままがいい……。

星南くんにギュッと、抱きしめててもらいたい。

「もういいの？」

「う、うん……ありがとう。朝からごめんね」

しばらくして、ようやく彼から離れた。

「でもまだ登校するにはちょっと早いね。公園でも行って、少し時間潰そうか」

「うん。賛成」

やっぱ不思議。

彼に会ったら、あんなに乱れてたはずの気持ちが落ちついた。

近所の公園に行き、ベンチではなくブランコに座った。

「ブランコとか、久しぶり」

「私も」

「真珠、嫌じゃなかったら登校も一緒にする？」

唐突な提案に少々驚いてブランコから落ちそうになった。

いきなり何を言いだすの……この人ったら。

「そういたい、とは思う……でも、そんな事したら……」

付き合ってるって誤解される。

今でも若干誤解されてるかもしれないけど。

「放課後はいつも一緒に過ごしてるし、どうせなら登校も昼休みも全部一緒に過ごさない？」

夢のような提案。

今の私達は、学校では一緒にいない。

会話すら学校じゃあまり交わさない。

「……嫌、かな？」

なかなか返事をしない私を、彼がちょっと不安気に見つめた。

「ま、まさかっ！嫌じゃない、です……」

「じゃ決定ね」

「でも、星南くんには他にたくさん友達が……」

「……別にいいから。真珠の方が、いい」

あ、ヤバい。

そんな風に言われると、変な期待をしそうになる。

「それに僕、友達そんないないし。基本的に寄ってくるのは女ばかり。男の方はあんま寄ってこないから。多分僕、男からは嫌われてるんだろうね。ま、なんとなーくつるんるような連中はいるけど。そいつらは表面上の付き合いっただけで、本当の友達じゃないよ」

どうやら私はいままで、彼に対してイメージを作り過ぎていたようだ。

カッコよくて人気者。

自分とは別世界の人だって、勝手に強く思い込んでた。

人って……本当はどんな人なのか、関わってみないとわからないもんだ。

「ま、最近じゃ女子もあの一件以来あんま寄ってこなくなったけどね」

「星南くん……」

「ん、どした？」

「私も……星南くんという方が、いい」

「ははっ。どうしたー？いきなり」

笑いながらも彼は、私の膝の上の手に自分の手を重ねてきた。

いつもより、とても優雅な朝。

【彼という方がいい】

それは都合が良いからとかじゃなくて、単なる自分の本心だった。

【Episode09】

公園で2人だけの時間を過ごした後は、名残惜しさを感じながらも学校へ登校。

いっそ2人でサボるのも悪くないかも……な一んてね。

「あれ、真珠、少し頬が緩んでない？面白い事でも思い出したのかな？」

「そんなんじゃないってば！もう、人の顔覗き込まないでよっ！」

完全に2人きりの世界に入ってる感じだった。

でも通学路を歩いて、学校が近くなっていくにつれて、登校中の同じ制服姿の子達がちらほら。

友達と楽しそうに登校する女の子達はみんなチラチラとこっちをみては、ヒソヒソ話してた。

周りの視線で、現実に戻された。

きっと不釣り合いだって噂されてるんだろうな……。

わかってるよ。

見た目は明らかに、釣り合っていないもんね。

「真珠……」

彼には、完全にお見通しのようだった。

「あんなくだららない連中の事なんか、気にしなくていいから。オロオロしたらダメ。堂々と胸を張ってればいいよ」

と、言ってくれた。

登校して、下駄箱で靴を履き替えてる時だって……。

「あの2人が、何で一緒に……？」

「まさか付き合ってるとか？」

「えっ、それはないでしょー」

「さすがにあれは不釣り合い過ぎでしょ！」

嫌でも耳に入るヒソヒソ声。

あえて、聞こえないフリをした。

「早く教室行こ、真珠」

「うんっ」

隣には彼がいる。1人じゃない、大丈夫。

あれ……そういえば名前……。

「学校なのに……真珠って呼んだよね？今……」

「あー、うん。いままでは学校と外とで、メリハリをつけようと、名前を呼び分けてただけど……なんか多河さんって呼ぶのに違和感を覚えだしちゃって……もう、呼び方を真珠に統一すればいいかと」

そうだったんだ……。

正直私も、苗字で呼ばれるより、下の名前で呼ばれる方が……。

「そういえば真珠は僕の事、まだ」

会話の最中の事だった。

後ろから「あのっ」とためらいがちに声をかけられた。

振り向くと、1人の男の子が立っていた。

黒淵の眼鏡に、目が少し隠れるくらいの長めの前髪、着崩す事なくきちんと着こなした制服。

いかにも真面目そうで、大人しそうな雰囲気の子だな、と思った。

「職員室って、どこかわかります……？」

「それなら2階に……案内、します」

「そうしてもらえると、有り難いです。ありがとうございます」

垂れ目に、前髪の間隙から見える下がり気味の眉。

優しそうな顔立ちで、笑った顔はちょっと癒し系かもしれない……と印象を受けた。

「僕、今日からここに来た転校生なんです……2年生です」

「私も……2年生」

「え、本当？じゃあ同じクラスになれたらいいね」

職員室に案内する間、彼は柔らかい物腰でたくさん話しかけてきてくれた。

おかげで初対面の人にも関わらず、あまり緊張せずに済んだ。

ただ1つ、奇妙な事に、隣にいる星南くんはずっと無言のまま。こういう時、率先してしゃべってくれそうなのに。

「ここが職員室……」

「案内してくれて、本当にありがとうございます」

「じゃあ……私達は、これで……」

私が頭を下げると、星南くんは無言で私の袖を引っ張った。

まるで、早くここから去ろうと言わんばかりに。

「あ、待ってください……！」

去ろうとした時、慌てた様子で引き止められた。

「僕、宮内です……！宮内、麻人と言いますっ！もしクラスが離れても仲良くしてくださいねー！ではっ！」

慌ただしく、彼……宮内くんは職員室に入っていった。

大人しそうな見た目だけど、意外と明るい子だったな……。

思えば、家族と星南くん以外の人と関わったのは久々かもしれない。

「真珠っ……」

「えっ……？」

星南くんは何故か切羽詰まった様子で、私の腕を握り締めてる。

その体は小刻みに震え、顔色も良くない。

「し、しないで……絶対に、しないでっ……」

ボソボソと発された声は、少し聞き取りにくかった。でもかろうじて聞き取れた。

「しないでって……何を？」

「あいつと……宮内とは、仲良くしないで……絶対に」

宮内 ？

まさか……知り合いなの？

「星南くん、あの子と知り合い……？」

「あの子は……昔の同級生……。整形する前に、通ってた中学の……」

「そうだったんだ……」

友達なの？

そう聞こうとしたが、やめた。

あの子と友達じゃないくらい、明らかだ。

様子からして、宮内くんは会いたくないと思う相手である事は間違いなさそう。

……馬鹿だ、私。

星南くんの様子がおかしい事に気づいてたのに……気の利いた事、何もできなかった。

「真珠……教室、行こうか」

「うん」

これきり、私達は無言になった。並んで歩いているのに会話は一切なかった。

教室に入ったら、タイミング悪くチャイムが鳴ってしまい、星南くんと話す事ができなかった。

すぐに先生が教室に入ってきて、教卓の後ろに立ってすぐ……。

「今日は転校生を紹介する」

無情にも、そう告げられた。

転校生という単語にみんな嬉しそうに興奮したり、騒がしくなった。

先生の「入って来い」という言葉の後、ゆっくりドアが開いた。

入ってきたのは……ついさっき会った人。

「宮内麻人です。仲良くしてください……よろしくお願いします」

控えめな自己紹介の後、大きな拍手。この子、同じクラスか……。

「席は、窓際の1番後ろに座りなさい」

「はい」

そういえば私の後ろには、いつの間にか新しい机が置かれていた。

宮内くんはゆっくり歩いて私の後ろの席に座った。すぐ背中が叩かれて、少し振り向くと。

「同じクラスになれたね。よろしく。えっと……何ちゃんかな？」

「多河、真珠です……」

「よろしくね……真珠ちゃん」

チラッと星南くんの方を見た。案の定、不安そうな表情をして、助けを求めるみたいに私を見ていた。

HRが終わってすぐ宮内くんはすぐ席を立った。

そしてなんと、星南くんの元へ。

「キミも、さっきの子だよ？さっきは全然話せなかったから……少し話そう？」

馴れ馴れしく、宮内くんは星南くんに後ろから抱き着いていた。

私は慌てて2人のそばに駆け寄った。

「ねえ、名前はなんていうの？」

「宮内くん、1時間目が始まるから席に座ってよう……？」

「名前だけでも教えてよ。真珠ちゃんとだけじゃなくて、キミとも仲良くしたいなー」

「……星南」

震えたか細い声で、星南くんはそれだけ言った。

すぐに宮内くんは彼から離れ、無言で首を傾げた。

「……へーえ、偶然だね。僕の知ってる人にも、せなあって苗字の人いるんだよ。ま……顔はキミとは全然違ったけどね」

ほんの一瞬だった。

宮内くんが、口角を上げて不気味に微笑んだ。

ゾクッと鳥肌が立った。

「でも、おかしいなあ……。キミの声は、似てる。あの子に……ソックリ。ねえ、苗字だけじゃなくて下の名前も」

ーキーンコーンカーンコーン

グッドタイミングで鳴ったチャイム。

宮内くんは不満そうに顔を曇らせて席に戻っていった。

先生が教室に入ってきてすぐに、星南くんは「具合が悪いので、保健室行きます」と言って出て行ってしまった。

付き添いたかったけど……人目を気にして、言えなかった。

後で様子見に行こう……。

【Episode10】

いつもより長く感じられた授業が終わって、急いで教室を出た。

保健室に行くと先生は不在。

1番奥のベット周りのカーテンが閉まっていた。ゆっくりカーテンの隙間から中を覗くと、彼は布団に包まっていた。

「大丈夫……？」

声をかけると、星南くんは慌てたように体を起こした。「来てくれたの？」と嬉しそうな顔をしてくれた。

「星南くんが、心配だったから……」

「……真珠、あの子と仲良くしないで」

「あの子って宮内くんの事……？」

ベットに腰かけて、コクコク頷く彼を見つめた。

何で……そんなに、あの子を……。

「宮内……中学時代、同級生だったんだ……顔を整形する前に通ってた中学で、クラスが同じだった……」

「……」

何も、言えなかった。

あの子は知ってる、過去の星南くんを。

「しかも宮内は……大人しそうな顔して、本当は……裏で僕を、いじめてた……執拗に」

信じがたい話だ、と一瞬思った。

宮内くんは、どちらかといえば教室の隅で静かに生きてるような大人しいタイプの人間。

いじめる側にはとても見えない。

「あいつは、先生とかの前では大人しくて真面目な生徒を演じてる。表では善人ぶってるけど、

宮内は……裏では卑劣ないじめっ子なんだよ」

小刻みに肩を震わす星南くんに、かける言葉が見つからず。

無言で両手を握った。

「わかった……仲良くしないよ。宮内くんとはもう、一切関わらない」

「うん……」

そうは言ったものの、不可能かもしれない。

クラスが一緒に、席は後ろ。多分、嫌でも言葉を交わす事になるだろう……。

……そんな現実を、今の星南くんには口が裂けても言えなかった。

教室に戻った頃には、2時間目の授業が始まった。

2人一緒に遅れて教室に入ったので、当然ヒソヒソ言われ、冷たい視線が降り注いだ。

席に座って、ノートや教科書を広げて、シャーペンを握った時、背中を突かれた。

宮内くんが後ろ向けて合図してる……。

しつこく背中を突かれ、時折小さな声で「ねえ」と言われたりしたが、無視した。

授業が終わって、

「真珠ちゃん、僕の事、無視したよね？何で？」

宮内くんは私の席まで来て、問い詰めるみたいにそう言った。

「別に……理由は、特に」

「……そっ」

短い返答をして、呆気なく私から離れて行った。

かと思えば、今度は星南くんの元へ。

「ねえキミ、星南蒼汰っていうんだってね！クラスの子から名前聞き出しちゃった」

「っ……」

「うーん…… あの星南くん とは、顔が全く違うよね。まるっきり別人」

口をつぐんで怯えたような表情をする星南くんに、宮内くんは容赦なく声をかけ続ける。

私は2人の間に割って入った。

「同姓同名……でもなさそうだよ？だって声は、 あの星南くん と同じだし」

「い、いい加減にしてよっ……過去の事なんて、いちいち言わなくても」

「おまけ背も高いし。顔が違うってだけで、他のところはぜーんぶ あの星南くん と一緒なんだよねー。偶然にしてはおかしいしー」

顔に似合わず、大きな声でしゃべるから、周りの人達がチラチラこっちを見てる。

中にはジーッと傍観してる人もいた。

「もしかして……キミ、整形したの!？」

その声は、賑やかな教室の中でも十分響き渡るくらいの大きさだった。

一斉にどよめき始めた。

「え、整形って……星南くんが？」「嘘～。あの顔、作り物だったの!？」あちこちから聞こえる会話。

やめて、と私は微かに声を振り絞ったが、蚊の鳴くような声は誰の耳にも届く事はなかった。

星南くんは涙目になって、周りの声を遮断するように両手で耳を塞いだ。

「そのリアクションは……マジっばいね。ま、普通に考えてあんな悲惨な顔じゃ悩むよねー。整形したくなんのも当たり前かー。僕だったらあんな顔じゃ生きていけない。ってか、あんな顔じゃ生きる資格すらなくない？」

カッとなって、気づいた時には平手で思い切り宮内くんの頬を叩いてた。

すぐに教室は静寂に包まれた。

馬鹿だった……こんな子を、優しそうだとか思った私……すごい馬鹿だった。

「真珠ちゃんっ……酷いっ！悪気があって言ったわけじゃないのに……気安く人を、叩く事ないじゃん」

宮内くんと同調するように、みんな口々に「確かに、酷い」「叩くのはさすがに、ね」「多河さんって意外と暴力的なんだね」と私に対する非難を漏らし始めた。

どうして……私ばっか、避難されるの……。

「でも……久々に再会した星南くんの顔が変わってたのは、本当に驚いたな」

「宮内くんって星南くんと同級生？」

「元同級生だよ」

「星南くんが整形ってマジなの？」

「中学時代、そんな醜い顔だったわけ？」

みんな宮内くんの周りに集まって、他人事だと思って根掘り葉掘り聞き始めた。

その光景を呆然と見つめた。

「あ、そうだ！明日、写真持ってきてあげるよ。クラス写真があるから」

私は……やっぱ弱い。無能にも程がある。

星南くんを守れなかった……何も、できなかった……。

元々、居心地の悪かった教室は今日の事でいっそう居心地の悪さが増した。

みんな私を暴力的な人間だと白い目を見た。

中には「あんな奴、クラスにいたっけ」と言う人もいた。

放課後になるとすぐに私は、示し合わせたわけじゃないが、星南くんと学校を出て、ラブホテルに行った。

ベットの上でお互い、自棄になった。

星南くんは荒々しく私を抱き、私は叫ぶように喘ぎ声を出した。

この時は、行為が兎角虚しく思えた。

「……ごめんなさい。今日……何もできなくて」

行為後の入浴で、隣でグッタリしたように浴槽に浸かる彼に謝罪を述べた。

「……仕方がないよ」

優しい彼は、簡単に許した。

これ以上は何も言えなかった。ここで下手に何か言っても、彼を余計に傷つけるだけ。

この日はホテルを出て、さっさと解散した。

私の心にも穴が空いた気分……。

夕ご飯はあまり喉が通らなかった。でも父と母は何も言わなかった。

2人とも私と会話をしようとしなかった。

特に母は腫れものを触るように接してきた。それが尚更窮屈に感じた。

夜は夜で……。

「真珠……今日も気持ち良くしてくれよ……」

部屋に父が押しかけてきて、性欲処理の道具にされる。

人形のように、言いなりになるしか道はない。

「……ん、何だ。またそんなもんしてるのか」

ジッと耐えていると、最中にも関わらず父は動きを止めた。

目を開くと、私にまたがる父の視線は左腕の方に向けられたいた。

左腕には傷を隠すためのリストバンド。

「鬱陶しいな……似合わない無駄なおしゃれはやめろ」

罵りながら、父がリストバンドを掴んだ。

「やっ……！」

拒絶した。

が、遅かった。

「なっ……なんだよこれはっ……」

乱暴にリストバンドは外され、リスカの痕跡は露わにされた。

「気持ちわりいなっ……!!」

意味もなく、父は私の頬を叩いた。

慌ててベッドから降りて、服を着ながら父は、

「お前はこんな気持ち悪い事を趣味にしていたのかっ!?頭がおかしいにも程があるっ……」

否定的な言葉ばかりぶつけてきた。

バタンと、乱暴にドアは閉まった。

父が出て行った後、しばらくベッドで仰向けのまま動かなかった。

「気持ち悪い、か……」

これ、趣味ってわけじゃないし。

真向から否定し過ぎだし。

……でも、これが世間一般の、普通のリアクションか。

こんなの見て、引かないでくれる人なんか……彼くらい。

結局私はふとした時、真っ先に彼を思い浮かべてしまう。

すぐ彼に……会いたって思ってしまう。

自分が思ってる以上に、私は星南くんに甘えて、依存してるんだ。

次の日、起きたらメールが届いてた。

星南くんからの「今日は休む」という内容。絵文字もない、素っ気ないもの。

じゃあ今日は1人か、と落胆しつつ制服に着替えた。

放課後、お見舞いに行ったら迷惑かな……？

学校に登校したら、教室が騒がしかった。

私の後ろの席に人だかりができていた。何故かみんな、宮内くんの周りに集まってる。嫌な予感しかしない。

「宮内くん……」

人ごみをかき分けて、宮内くんのそばへ。

「あ、真珠ちゃん。おはよう」

ニコッと向けられたのは、わざとらしい笑顔。

その手には写真。

……まさか、それは。

「あ、これ？中学2年の時のクラス写真だよ。昔の星南くんが写ってるから、みんなに見せようと思って」

「本当にそれ、星南くんなの？」

「今と顔、違い過ぎでしょ」

「でもこの顔じゃ整形に走るのは当たり前っしょ」

みんな、口角が上がってる。笑ってる。

人の過去を笑いのネタにしてる。

最低な奴ら……。

「ふざけるのも、たいがいにしてよ」

宮内くんの手から素早く写真を奪った。

「過去の事を、今更言わなくてもいいじゃん!!星南くんが散々苦しんで傷ついた事、知らないくせにっ……」

写真を持ったまま、教室を飛び出した。

「……何、あの女。ムカツク」

宮内くんがそう呟き、舌打ちしてた事は、私を含め誰も知らなかった。

駆け込んだのは、行為の場所に利用してる空き教室。

カギを閉めて、床に座って。

「こんな物……」

躊躇なく写真を破いた。

何度も何度も、細くなるまで破り続けた。

やがて写真は修復不可能なくらいにチリになった。

「ははっ……何よ、こんなごみクズ」

そのまましばらくの間、ただのごみとなつ写真を眺めた。

世の中は、顔で全てが決まるのか.....醜い容姿は罪なのか。
そんなの理不尽過ぎる.....。

【Episode11】

「……そっか、そんな事が」

「うん……あの子、見かけによらず冷血だね」

放課後、お見舞いのため彼の家を訪れた私はベッドに彼と並んで座って、今日の出来事を話した。

「でもあの写真はビリビリに破ったから。安心して……」

とは言ったものの、あの写真はクラスのほとんどの人に見られた事は間違いない。つまり、過去の星南くんの姿を知られてしまったという事だ。

「ありがと。……明日は学校、行けるから。今日は1人にさせてごめんね」

「……ううん」

本当は学校、行くの嫌でしょ？

ほとぼりが冷めるまで休むのも、1つの手段だと思うけど。

「あんま休んだら、おばさんに怒鳴られるから……明日は体を引きずってでも行かないと」
休むなんて甘い事は彼には一切許されていない。

星南くんは悪い事してないのに、どうして苦しまなければならないのだろうか。

彼は愛される努力をした。

たくさん悩み、傷ついた。

……そろそろ幸せになるべきなのに、理不尽だ。

「私が、いるよ」

「……真珠？」

「私だけは何があっても……ずっと星南くんの味方、だから。何があっても、そばにいたいって思ってるから……」

重い女って思われたかな？こんな言い方して。

でも星南くんは穏やかに笑ってた。

「僕も……ずっと真珠の味方だから」

嬉しい言葉を、私にくれた。

建前だったとしても……嬉しかった。

その後、学校では、星南くんが整形したという話があっという間に広がった。

廊下を歩けば、

「あの顔が整形……」

「整形前は不細工な顔だったんだってー」

噂を楽しむ会話が飛び交う。

だが星南くんは噂を気にせず、堂々としてた。

だから私もあえて慰めるような事は言わなかった。

人気者だった彼の地位は一変。

今やクラスで浮いた存在となった。

更に周囲は私と星南くんが一緒にいるのを見て「あぶれ者同士が仲良くしてるー」と馬鹿にした。

でも平気だった。

1人じゃないってだけで、十分心強かった。

「平和で……ちょっと気持ち悪いな」

「えっ？」

数日経った、ある日の放課後。

アイス屋さんでアイスを買って、それを公園のベンチに座って食してる時、彼がポツリと意味深な事を言った。

「宮内だよ……あいつが何もしてこない。絶対、何かしてくるって思ったのに……」

そう。

転校初日、あれだけ私達に絡んできていた宮内くんは、一切絡んでこなくなった。

だから星南くんの言う事には私も同意。

「何か、仕掛けてくるかもしれない……まだまだ、油断大敵っ……」

アイスの入ったカップを持つ手が震えていた。

不安は簡単にはぬぐえない。

いつまでもしつこく、付き纏う……。

「……私さ、最近、リスカ……あんまやらなくなったの」

不安で震える彼に対し、一方的に口を開いた。

「ずっと前はほぼ毎日やってたのに……不思議だよ。それに私、ちょっと憧れてたの。こうして誰かと一緒に買い食いしたり、登下校したり……。星南くんのおかげで私の憧れ、叶っちゃったの」

声に出して「へへっ」と笑ったら、つられたのか、笑ってくれた。

でもすぐ笑顔は消え、不満そうな表情になった。

「それ……いい加減やめてよ。すごく距離を感じるんだけど」

「え、それって？」

何の事？意味もなく、辺りをキョロキョロ見回した。

「呼び名！ずーっと星南くんって呼んでるじゃん！僕は真珠って呼んでるのに……」

そういえば、そうだ。

呼び名で拗ねる彼が可愛く思えた。

「星南くんって呼ぶのはもう終わり。蒼汰って呼んでよ」

「ええっ！無理無理っ！それは無理だって！」

星南くん呼びが定着してるし……何よりも恥ずかしい！

「そんな拒絶しないでよ、悲しいなあ。蒼汰って、真珠に呼んでもらいたいのにな……」
眉を下げて、子犬のようにショボンとする彼を見たら胸がきゅうっとした。
裸を見られてるんだから今更恥ずかしがる事じゃない、と腹をくくった。

「そ、そう……そ、蒼汰くんっ！」

「……くん付けじゃなくていいのに」

「呼び捨てはハードルが高いから、くん付けでいっぱいいっぱい」

「あっそ。でもま、くん付けでも大満足かな」

常に不安がちらついても。

ずっとずーっと、このまま穏やかな時間が続いてくれたらいいな。

「おい、多河と宮内！この教材、資料室に運んでおいてくれ」

平和な日々が続いていたが、不運が訪れた。

先生はよりによって私と宮内くん雑用をおしつけた。

不安そうな顔の蒼汰くんと目が合ったけど、口パクで「大丈夫」と伝えて小さくピースした。

さっきの授業で使った教材を分担して持って、無言で廊下を歩いた。

気まずくて、つい急ぎ足になった。

資料室に着いて、教材を置いて。

さっさと教室に戻ろうと、背を向けてドアに手をかけた時だった。

「……どうして」

背後から声をかけられた。

「……何が？」

背を向けたまま返答した。

コツコツと、宮内くんが近づいてくる足音がする。

「どうして、星南の味方すんの？底辺の人間をちょっといじめる事が、そんな悪いの？」

振り返ると宮内くんはすぐ後ろに立っていた。

更に宮内くんは手を伸ばし、私の背後の資料室のドアのカギを素早く閉めた。

「いーっつもイイ子を演じてる僕はストレ溜まってんの。だから、いじめくらいしか発散法がないわけ。底辺にいる負け組の星南はストレス発散の道具に適任なんだよ。わかる？」

普段とは、全く違う低いトーン。

大人しそうなその顔は、口角を上げ、不気味に嘲笑ってるように見えた。

「わかんない。理解不能だよ、そんな自己中な理論」

「……ぼっちの醜い奴をいじめて何が悪いんだよ。星南が苦しんだって、困る奴なんか誰もいないだろ」

「い、いるよっ……！私は」

「あー、はいはい。わかったわかった。キミが何を言おうとしてるか、だいたい想像できる。偽善者の綺麗事なんか聞きたくないよ」

眼鏡の奥の目が、鋭く私を睨みつける。

私も睨み返した。

こういう時は弱気になったらダメ。強気でいなくちゃ……。

「なんかさあ、あんたも気に入らないんだ。叩いてきたし、勝手に人の写真処分したし、無駄に偽善者ぶってるし」

「偽善者ぶってなんか」

「とにかく！僕は、あんたも嫌いだから。……覚えとけよ」

後味の悪い言葉を残し、カギを開けて宮内くんは出て行った。

この事は蒼汰くんには言わなかった。

理由は単に、不安を煽るようなまねしたくなかったから。

【Episode12】

それからすぐの事だった。

席替えが行われたのは。

前と後ろだった私と宮内くんの席は呆気なく離れ……。

「あ、隣だ」

「すごい偶然……」

私の席は廊下側の1番後ろの席。隣の席はなんと蒼汰くん。

奇跡的な偶然だ。

これからの学校生活が更に楽しくなりそうな予感がした。

現に今、蒼汰くんのおかげで大嫌いだった学校が毎日楽しい。

席が離れた事で、宮内くんに絡む機会はめっきりなくなり、転校初日にあんなにフレンドリーだったのが嘘のように、宮内くんとは赤の他人のような関係になった。

何事もなく恐ろしいくらい平和な日常は、崩れる事はなく経過していった。

リスカの傷を見られてから、父親に凌辱される事はなくなったが、家の居心地は前より悪くなった。

汚い物を見るような、軽蔑した目で私を見る父親。

腫れ物を触るように私に接する、よそよそしい態度の母親。

蒼汰くんも時折、おばさんに叩かれたと辛そうに漏らしていた。

相も変わらず、私達は家に居場所がない。

「僕ら、まだ2年だけど……進路考えてる？」

「進路かあ……」

夕暮れに染まる放課後。

テストが近いという事で、誰もいない図書室で勉強会を開いていた。

最初は勉強していたが中盤からあっさり脱線。互いにシャーペンを置いて、おしゃべりモードになった。

だが話題は進路の事。

2年生でも、進路を決めてる人は決めてる。私は先の事なんて、あまり考えられない。

やりたいものも、やりたい事も、何もない。

将来が……真っ暗だ。

「僕、寮のある大学に行く。家を出なきゃいけないから……」

「私も……寮のあるところに、行きたい」

お互い決まってるのは、家を出るという事くらい。

私にとっては家を出るのが目標みたいなものだ。

「真珠」

「うん？」

「いっそ、一緒の大学行かない？」

「えっ!!」

「2人で安いアパート借り住むってのも、1つの手だよ？一緒に住めば毎日、好きな時にやれるね？」

「変態」

でもその提案に、胸が躍ったのは事実。

一緒の大学に行って……。

一緒にひとつ屋根の下を……。

全く……夢みみたいな提案だね。

「言っとくけど……今の提案は、冗談じゃなくて、一応本気のつもり……一緒のところ行けたらって、思ってる」

こんなに頬が熱いのは、窓から差し込む夕日が顔に当たるせい？

それとも……。

「じゃ、じゃあ……2人で、探さないかね。大学と……安いアパート」

「真珠……」

「でも私、あんまり頭良くないから、レベルの高いところは厳しいかな」

「大丈夫。僕がビシバシ勉強を教えるから。覚悟してね？」

「はい」

2人きりの静かな図書室で、ささやかな約束を交わした。

高校を出ても一緒なんて……本当、夢見てるみたい……。

この頃、しょっちゅう思うんだ。

セフレという名の関係から、脱出したいって。

友達でもない、セフレでもない、それ以上の関係になれたらいいのにな……馬鹿な事を考えちゃうんだ。

次の日も蒼汰くんはいつも通り家まで迎えに来てくれた。

「毎日、ご苦労様ですね」

「いえいえ。これも僕の務めですから」

朝から冗談を言い合い、学校に行こうとした。

が、私は気づいてしまった。

「蒼汰くんっ！」

「え……ああっ!？」

勢いよく、蒼汰くんの前髪を両手でかき上げた。

露わになったのは、右目の上に貼られた絆創膏。

「ちょ、真珠っ！やめてよっ……！」

彼らしくなく、乱暴に手を振り払われた。

更には威嚇するように両手で前髪を押さえた。

「蒼汰くん……」

「転んだだけだし……」

「……嘘ばかり」

「この話はもう終わり。早く学校行かないと」

「本当はそれ……」

両手で、彼の顔を包み込んだ。

「おばさんに、やられたんじゃないの？」

「っ……」

彼の顔色は見る見るうちに真っ青になった。

凶星なのは一目瞭然。

この期に及んで転んだなんて嘘つくんだもの。この人は本当に……優しすぎるよ。

「最近おばさん……イライラしてるんだ。金がない金がないってしょっちゅう言ってるんだ。自分が使い込んだくせに。この傷は、おばさんに頬を叩かれて、転んで……テーブルの角にぶつけた」

聞いているだけで痛々しい話。

「前髪で上手く隠せたと思ったのに……真珠には敵わないなあ」

「当たり前じゃん」

だって……今は誰よりも、蒼汰くんの事をそばで見てるんだもの。

これくらいの事、すぐ気づくよ。

本当は抱え込まずに相談くらいはしてほしいけど……迷惑かけたくない、とか思ってるんだろうな。

この日の放課後、私の方から彼を誘った。

私の誘いに彼は驚いていたが、すぐにいつもの調子で「珍しいね」と言いながら笑った。

「あそこで、しょっか」

彼の手を引いて、例の空き教室まで歩いた。

別に性欲に飢えてるわけじゃない。

そうじゃないけど……私が誘ったのは単に……。

空き教室に入ってすぐ、私は彼の制服のネクタイを外した。

「本当に今日はどうした？ここに入って、すぐ襲うなんて……そんなにしたかった？」

「そういうわけじゃない、けど」

「けど？」

「私の勝手な思い込みかもだけど……」

ネクタイを放り投げ、私はご乱心したかのように、制服を抜いだ。

身にまとっていた制服を全て抜いて、下着姿になった時、私は手を止めて呆然とする彼を見ながらこう言った。

「蒼汰くん……無性に人肌が恋しい気分なんじゃないかなって。ただ、そう思っただけ……」彼の口元が微かに微笑んだ気がした。

でも、目は笑ってない。

明らかに悲しそうで、泣きそうな目をしてる。

勘が当たったのか、単なる自意識過剰なだけか、結局曖昧なまま。

いつも通り、裸になって交わり合った。

校内なので極力声を抑えながら。

「んっ……あっ……」

それでも時折漏れる声は、自分のものとは思えぬほどイヤらしく思えた。

案の定、蒼汰くんは縋るように体で激しく私を求めた。

校内で淫らな行為をする事に罪悪感も微塵もなかった。

だが私は、気づいてなかった。

自分が大変な過ちを犯してしまっている事に……。

行為に夢中で、ツメの甘さに、全然気づけてなかったんだ……。

翌日、登校してすぐに違和感に気づいた。

「っ……」

居心地がすごく悪い。

隣には蒼汰くんがいる。

1人じゃないのに。

酷く居心地が悪くて、吐き気がするくらい……。

「……様子が変だね」

蒼汰くんもすぐ異変に気付いた。

何故か周囲の視線が全て、私達に集中してる気がした。

これは自意識過剰じゃない。

本当にみんな、私達の方を冷たい目で見てるんだ。

つい、気弱になって顔を伏せながら歩いた。

一ガラッ

教室に入った瞬間、一斉に視線がこちらに向けられた。

一瞬静まり返ったかと思ったら、すぐにまた騒がしくなった。

ふと、一か所に人だかりができてるのに気づいた。

人が集まっているのは……宮内くんの席だ。

嫌な予感がした。

カバンを置いてすぐ、迷いなく宮内くんの元へ歩み寄った。蒼汰くんも少し後ろをついて来た。

「宮内くん」

人ごみをかき分け前を出て、右手の平で軽く彼の席を叩いた。

「……真珠ちゃん」

宮内くんは一瞬ニヤリと笑った。その手にはスマホが握られている。

「丁度よかった。聞きたい事があったんだ……」

立ち上がった宮内くんは勝ち誇ったような顔をして、私の前にスマホを突き出してきた。

「っ……何、これ」

スマホに表示されたモノを見て、固まった。

周りの人達がクスクス笑ってる。

軽蔑するみたいに睨んでる人もいる。

私はただただ、置き物のように佇む事しかできなかった。

【Episode13】

「真珠、どうかした……？」

いつの間にか隣に立っていた蒼汰くんは、私の肩に腕を回しながらスマホに視線を移した。その瞬間、彼の顔から血の気が引いていく。

スマホの画面に写っていたのは……空き教室で、裸になって行為をする私と蒼汰くんだった。画面の私は呆れるくらい淫らで、間抜けな表情をしていた。

「昨日、偶然この空き教室の前を通ったら声が聞こえてきて……気になって覗いてみたら、2人がやってたってわけ。学校でこういう事するなんて……ちょっと無神経なんじゃない？」

ここでようやく、自分の大失態に気づいた。

昨日、私は……カギをかけ忘れたんだ……。

カギを閉めずに、そのまま彼と……馬鹿だ、私が軽率な事をしたせいで……。

「この写真、あまりにも衝撃的過ぎて、いろんな人に見せちゃった。同じクラスの人や、隣のクラスの人にも。後、何人かにメールで転送したし……」

この画像が、いろんな人に出回っているであろう事は嫌でも予測できた。

つまり私達は晒し者に……。

私のせい、で……。

昨日、誘ったりしなければ……。

もっと、ちゃんと用心していれば、彼をこんな事に巻き込まなくて済んだのに。

「……大丈夫、気に病むのはやめて。真珠は何も悪くない」

私の気持ちを察してるように、蒼汰くんは耳元で優しく、力強く呟いた。

そしてキッと宮内くんを睨みつけた。

「宮内……本当は僕らの後、つけてたんじゃないか？」

「……何の事言ってるの？」

「あんたは汚い奴だからっ……僕の弱みを握るために、尾行してたんだろっ!本当にお前はっ……」

蒼汰くんが宮内くんに掴みかかった。

その弾みで、宮内くんの手からスマホが離れ、盛大に音を立てて床に転がった。

いっそう騒がしくなる教室。

私は止めに入ろうとしたが……。

「お前らっ!!何やってるんだ!?!」

先生が教室に入ってきた事で、騒がしかった空間に静寂が訪れた。

蒼汰くんはハッと我に返ったように、慌てて手を離した。

「朝から揉め事か?しかも星南と宮内、お前らは2人とも真面目で優秀じゃないか」

そう言いながら先生は、床に落ちたスマホを拾い上げた。

ヤバイ、と思った時にはもう手遅れ。

スマホに表示されたものを見た先生は一瞬で目の色を変えた。

軽蔑するような目で私と蒼汰くんと見て、
「星南と多河……2人とも、今すぐ職員室に来なさい」
と静かに言った。
宮内くんは勝ち誇ったような表情をしてた。

とても、呆気なかった。
私と蒼汰くんの関係はあっさり周囲に知られてしまった。
特別な秘密がバレる瞬間は兎角、呆気ないものだった……。

一度壊れてしまったものは、もう二度と……元には戻せない。

職員室で、あの写真に写ってる事は、本当なのかと聞かれた。
私も彼も否定せずに、事実だと認めた。
あの写真には、私の顔も彼の顔もばっちり写ってる。
おまけに行為の最中だと、ひと目でわかる。
弁解の余地なんかない。

私と蒼汰くんには、3日間の謹慎処分が下された。

ーパンッ

「あんたは本当にっ……なんて親不孝な子なのっ!!あんたが学校で、恥ずかしい問題を起こすから、もう私……恥ずかしくて外歩けないわよっ!？」

母は私のした事に大袈裟なくらい、酷く悲しんでいた。

平手打ちをして、その場に泣き崩れていた。

私はそれを他人事のように見ていた。

父は母を宥めながら、私を睨んだ。

私のした事って……そこまで恥ずかしい事……？

ただ単に……彼に、寄り添ってただけ。ただ、それだけじゃん……。

「やっぱり私の……私の教育が、悪かったのよ……」

「悪いのはお前じゃない。真珠の方だろ？自分を責めるな」

何で私、悪者みたいに扱われてるの？

居心地が悪くて、逃げるようにリビングを出た。

自室に入って、ベットに座ってポーっと天井を見つめた。

今、私の中にある感情は1つだけ。

【蒼汰くんに、悪い事をしてしまった】

この思いだけに支配されていた。

心の中は、後悔でいっぱいだった。

謹慎処分の間、私は何もしなかった。

何もする気が起きなかった。

ただ部屋で、自堕落に過ごした。

父と母と顔を合わせないためにも、なるべく部屋にこもった。

まるで、ダメ人間のような生活だった。

蒼汰くんと連絡を取ろうにも、携帯は母に取り上げられたので無理だった。

勉強もほとんどしなかったくせに、唯一やったものといえバリス力だけ。

真夜中になると決まって、憑りつかれたように自傷行為に溺れた。

自分を傷つけ血を流す事で、どうにか現実を紛らわせた。

そんな調子で3日が経ち、謹慎処分が明けた。

朝、家を出ると、いつも迎えに来てくれるはずの彼の姿はなかった。

1人で登校し、3日ぶりに学校に行くのを待っていたのは周囲の冷たい視線。

「あの子でしょ？例の……」

「あんな地味でブスな子がねえ」

「大人しそうな顔して、実は遊んでるんだよ」

周りの人はみんな、私を見ながら噂話をした。

気にしない、気にしない。そう自分に言い聞かせて、どうにか耐えた。

教室に入ると、騒がしかったのが一瞬にして静まり返った。

そして一斉にヒソヒソ声でいっぱいになった。

俯きながら、自分の席に向かった。

机には黒い油性ペンで大きく「淫乱女」と書かれていた。

「……」

何もかも、壊れてしまえ。

ふと、そう思った……。

この日、蒼汰くんは学校に来なかった。

次の日も。

その次の日も。

いつまで経っても学校に来る事はなかった。

先生に聞いても何も教えてくれない。

延々と孤独な日々が続いた。

学校では氷のような目で見られ、汚らわしい者として扱われ。

家では親に厄介者扱いされた。

何度か彼の家に行ってみたが、チャイムを鳴らしても誰も出ない。

蒼汰くんの隣にいる事すら、許されていない.....。

居場所をなくした私に残ったのは.....夢も希望もない、絶望だけだった。

【Episode14】

もしかしたら、私は思った以上に蒼汰くん依存してるのかもしれない。
依存して、縋りついてたのは私の方なんだ。

「え……何それ。どういう事……？」

「だから……引っ越すのよ。同じ事、2回も言わせないで」

重苦しい空気だけが漂うリビング。

向かい側に座る母は、片手で頭をかきながらため息をついた。

夜、いきなり話があるとリビングに呼ばれた。

母の口から告げられたのは「引っ越す事になった」という事実。

「引っ越して……何で？どうして、勝手に決めるの……？」

「……さっさと荷物をまとめて。早急に、準備にとりかかりなさい」

あくまで、母は淡々と話した。

急すぎる事態に頭がついていけない。

「……どこに引っ越すの？」

「ここから、遠く離れた田舎よ」

「嫌……私、行かない。行きたくない。こっちに残って1人暮らしする」

「何を言ってるの!?そんな自分勝手な事が許されるわけないでしょ!？」

目に涙を浮かべながら、母は怒鳴った。

父は険しい顔を浮かべ、煙草に火を点けた。

ユラユラと。

私達の間には煙草の煙が漂った。

「だいたい、誰のせいで引っ越す事になったと思ってるの……もう頼むからっ!!これ以上、何も起こさないでちょうだい!？」

「1人暮らし、させてよ……」

「真珠っ!!いい加減にしなさいっ!!だいたいお前は勝手なんだ。1人じゃ何もできないくせに、1人暮らししたいなんて甘えた事言うな」

両手で顔を覆って、泣き喚く母。

それをただ、宥める父。

ぼんやり他人事みたいに眺める私。

癪に障るが、父の言った事が何度も頭の中で繰り返された。

『勝手』

『1人じゃ何もできない』

『甘え』

この言葉が、グルグル回る。

.....そうだよ。私は勝手な女だよ。

まだ17歳で、親に養ってもらわないと生きていけない。

1人じゃ何にもできない、自分勝手な子供なんだ.....。

でも嫌だ。

引越しなんかしたくない。

蒼汰くん、会えなくなっちゃう.....。

彼の隣が今の私の、居場所なの。

唯一の心の拠り所を、お願いだから奪わないで.....。

懲りずに「1人暮らしする」と何度か訴えたが、結局は反対されて怒鳴られるだけだった。

子供の私には、大人しく従うという道しかなかった。

その日から、気が進まないが、少しずつ荷造りをした。

相変わらず母は携帯を没収したまま。

学校では、日が経つにつれて噂は薄まりつつあったが、淫乱女という嫌なレッテルは貼られたまま。

蒼汰くんにも会えないまま。

夜中、窓から空を見ながら「会いたい」と何度も呟き、何度も涙を流した。

一言でいいから話したい。

せめて、「さよなら」だけでも言いたい。

そんな私の願いが通じたのか、奇跡的な事が起きた。

「今日は.....よく晴れてるな.....」

荷造りが落ち着いてきた、ある日の真夜中。

この日も私は、窓を開けて空を見上げていた。

その時、微かにだが「真珠」と声が聞こえた。

私を呼ぶ、聞き覚えのある声.....まさか。

視線を下に移すと、

「っ.....!!!」

家の前の道に、彼の姿があった。

私が今、1番会いたい人.....。

窓を閉めて急いで1階に下りた。当然、両親は寝ているので音を立てないように注意した。

玄関のドアを開けて、外に出て、一目散に彼の方へ駆け寄った。

「蒼汰くんっ.....」

勢いよく抱き着いた。

「ちょっ……」

戸惑った様子を見せつつも、私の背中にはゆっくり腕が回された。

久しぶりに触れる彼の温もり。

すぐく落ち着く……しばらく、このままでいたい。

真夜中に、家の前で抱きしめ合う私達を、三日月が静かに照らしていた。

「あ、あの……話を、してもいいかな？」

そう言われ、ようやく我に返った。

慌てて離れ「ごめんっ」と言うと、彼は少々頬を赤らめながら「いや……」と歯切れ悪く呟いた

。

「ここじゃあれだから、公園に行かない？真夜中の公園って、ちょっとロマンチックかも」

「いいよ……行こう」

差し出された手を、強く握った。

恋人じゃないくせに手を繋いで、公園までの道のりをお互い無言で歩いた。

言いたい事は、お互いたくさんあるはずなのに。

いざ、本人を目の前にすると言葉が何も出てこない。

公園に着いて、ひとまずベンチに座った。

「ジュース、飲む？そこの自動販売機で買ってこようか……」

「ううん、大丈夫」

「そっか……」

「うん……」

あっさり、途切れた会話。

話したい事はいっぱいあるけど、まずは何から話せば……。

「ごめんね……真珠」

……え？

何故か告げられたのは、謝罪。

何の意図の謝罪かわからず首を傾げてみせたら、

「いままで……1人にさせて、ごめん。本当は、そばで……守りたかったのに……」

と、声を震わせ、申し訳なさそうに言った。

……そんな事、気にしてたのか。彼の気遣いに、少し頬が緩んだ。

「平気だよ。その気持ちだけで、十分。でも学校、居心地悪いの。家も居心地悪い。携帯は没収されたから、連絡手段もなくなっちゃったし」

「僕も……携帯、没収された……。おまけにおばさんが、大激怒して、一切外出するなって……」

」

じゃあ、いままで学校を休んでたのは、軟禁されてたせい……？

「お婆さんは尚更、僕が嫌いになったんだろうね。謹慎処分くらってから、毎日毎日、殴られるようになった。顔とか見える部分には何もしないで、体だけを集中的に。だからもう僕の体は痣だらけでボロボロなんだ」

私が自堕落な日々を送ってる間も、蒼汰くんはひたすら苦しんでいたんだ。

苦しみ続けて。

助けを求めても、誰も助けてくれない酷な環境。

暗い闇の中をもがいていたんだ……。

「いつも、外出させないために部屋にカギをかけられて閉じ込められてて……暴力を受ける時だけは、部屋からリビングへ引っ張り出されるって感じなんだ。今日は、暴力を受けてる最中に、なんとか力を振り絞って家から抜け出してきたんだ」

穏やかな表情の彼が、とてつもなく切なく見えた。

何で平然としてんの。

つまりそれって、真夜中まで暴力を受けてるって事でしょ？

しかもその最中に抜けてくるなんて……。

「馬鹿……家に帰ったら、蒼汰くん……また、お婆さんに」

「そうだね。確実にお仕置きされるね。でも、いいんだ」

「よ、よくないっ……」

「いいんだよ。真珠に会えたから」

「っ……」

「ずっと、会いたかった……真珠」

精神的にも肉体的にも追い詰められてるはずなのに。

リスクを冒してまで、会いに来てくれた。

私なんかのために。

やはり私は、いつも彼に救われてばかり。

でも私は彼に何ができてるんだろう。

彼を守る事すらできてない。

こんな私の存在は、一体何なんだろうか。

ああ、でもまずは言わなきゃ。

あの事を真っ先に伝えなくちゃいけない。

もうすぐ引っ越すから、会えなくなってしまう、酷な事実を。

【Episode15】

「蒼汰くん、あのね……」

「ん？」

ためらったが、どうにか話を切り出した。

本当は嫌だけど。

私はこのままずっと彼の隣にいたかった。

「わ、私……」

今となってはもう、あの約束は幻でしかないんだ。

「私、引っ越す事になったの。もうすぐ、ここから遠く離れたところに行かなきゃいけないの……」

一緒にの大学に行って、アパート借りて2人で住もうと約束した日が、果てしなく遠い過去の出来事だったように感じる。

「……そ、うか」

「本当は、嫌なんだけどね。でも……仕方がないんだ。結局私は、1人じゃ何もできないようなダメ人間だから」

「……」

怖くて、彼の顔は一切見れなかった。

流れる沈黙に、息が詰まった。

「蒼汰くんとはもう……さよなら、だね。本当はもっと、一緒にいろんな事をしたかったんだけど……」

「……」

「こんな、大事になっちゃうなんてね。私達のした事って……そんなに、重罪なのかな……？」
蒼汰くんが沈黙を続けている事に不安を感じ、一方的にしゃべり続けた。

「蒼汰くん……ごめんなさい」

ベンチから立ち上がって。

蒼汰くんの方を向いて、頭を下げた。

「私が学校で誘ったせいで、蒼汰くんまで大変な事になって……」

頭を下げたまま、しどろもどろになりながら話していると「顔、上げて」と言われた。

ゆっくり顔を上げて蒼汰くんの顔を見ると、微かに口元が笑っていた。

「真珠に責任があるわけじゃない。あの日、もし真珠に誘われなくてもきっと僕の方が誘って、学校でやる事になったと思う。どのみち、こうなる運命だったんだよ……」

穏やかに話す彼を見て、 優しすぎる と思った。

そんな風に優しいから。

だからいつも、私は甘えちゃうんだ。

「にしても真珠は、馬鹿だね」

「なっ！ひ、酷い、いきなり」

「だってそうじゃん。真珠ってば、引っ越しするだけなのに、一生お別れするみたいな言い方するから」

「それは……」

だって、会えなくなっちゃうじゃん。

今みたいに、公園で話す事すらできなくなるんだよ……？

遠く離れちゃったら、きつともう……。

「また会えるんだから、しみりした風に言わなくていいじゃん」

簡単にそう言う彼に、少し呆気にとられた。

何で断言できるんだろう。

そんな確証、どこにもないのに。

「もちろん、また会えるって確証はないけど、一生会えないって確証もどこにもないよ」

私の心を見透かしたように、そう言われた。

彼の言う事は……一理ある。

「会いたいって思えば、また会えるよ」

「……本当に？」

「うん、本当に」

さよならだとばかり思ってたけど。

また会えるなんて甘い考えを信じていたい、そう強く思う自分がいた。

「じゃあ……信じてるね。また、再会できるって……」

「うん……」

蒼汰くんは少し間を置いて、立ち上がったと思ったら。

私の目をジッと見つめてきた。

すぐ逸らそうとした。

けど、「ダメ」と言われ、片手が頬に添えられ、彼の方を向けさせられた。

「今から言う事は、すごく大事な話だから」

「え、う、うん」

「一度しか言わないから、しっかり聞いて」

真剣な眼差し。

ごくり、と息を呑み、頷いた。

「また再会できたら……その時は、この関係を解消しよう」

「……え」

「僕らの今の関係は、セフレみたいなもんでしょ？だから、再会した時、セフレは解消」

改めて、セフレと言われ。

更にはそれを解消しようと言われ、さすがに落ち込んだ。

そうになったら私達.....もうおしまいって事？

「2人で、新しい関係を築いていこう」

「.....！」

え？そ、そういう事？

新しい関係って事はまさか.....もしかして。

アタフタする私を少し笑いながら、彼は言葉を続けた。

「体だけの関係はやめて、また再会できた時.....その時は、僕と正式に付き合っしてほしい」

幻を見てるようだった。

黙る私に彼は不安そうに「返事は？」と言った。

私は「うん」と言って、何度も何度も大きく頷いた。

断る理由なんかない。

むしろ、嬉しくて泣きそうなくらい。

離れてしまうのは寂しいけれど、とても素敵な約束を交わした。

まさに夢見心地の気分。

でも、夢はもう終わり。

いつの間にか空が明るくなってきた。夜明けが近い。

「帰らなくちゃ.....」

本当は帰りたくないけど。

「家まで、送るよ」

「ううん。1人で帰れるから平気だよ」

「そっか」

一緒に公園を出て、

「じゃあ、バイバイ」

名残惜しい気持ちを堪えて、笑って手を振って、帰ろうと背を向けた。

でもすぐに腕を掴まれた。

ビックリして、蒼汰くんを見ると少し不満気な表情をして、

「バイバイ じゃなくて、またね でしょ？」

と言った。

「うん.....またねっ！蒼汰くん」

そう言ったら、今度は満足そうに笑った。

「じゃあ、また」

「また……会おうね、蒼汰くん」

「当たり前だよ。絶対また会えるから」

手を振って、お互い背を向けて歩いた。

私は振り向かず、前だけを見て歩いた。

また会えるんだもん。悲観的になったらダメ。

再会できる事を強く信じてなきゃ……。

引っ越す前に、もう一度くらいは蒼汰くんに会えるかなって思った。

でも期待とは裏腹に、蒼汰くんは学校に来る事はなく。

結局会えないまま、私は両親と共にこの町を離れた。

学校の人達には引っ越す事は言わなかった。

ひっそりと転校した私は、あっという間に忘れ去られるだろう。

私が得た綺麗な思い出は……。

蒼汰くんと過ごした時間だけ。

せめて引っ越す前に、もう1回くらいは会いたかった。

でも結局は、公園で話し合ったあの日が、彼に会った最後となってしまったのだ。

時が経ち、あの出来事から1年半が過ぎた。

当時17歳、両親と共に住み慣れた町を離れた少女は、1人で戻ってきた。

「この辺り、特に変わってないなあ……」

高校を卒業した彼女は、以前住んでいた町の大学を受験し、見事合格。

その大学は全寮制のため、彼女は親の元を離れ1人暮らしする事になっている。

世間は春休み真っ最中。

入寮する前に、思い切って会いに来たのだ。

以前、肉体関係にあった……星南蒼汰に。

彼女は彼と、

「再会できたら、セフレは解消して正式に付き合う」と約束をした。

彼は今でもその約束を覚えてくれてるだろうか。

彼女の胸に、言いようのない期待と不安が入り混じる。

なんとか不安を押し殺し、彼女は足を進めた。

彼の家に行く前に、彼女は以前に住んでいた家に寄ってみた。

そこには表札がかかっており、新しい住人がいるようだった。

少し寂しさを覚えながらも、彼女は再び足を進める。

この1年半。彼女にとっては、とてつもなく長い時間を感じられた。

引っ越しをしてからの彼女の生活は、以前に増して自堕落になった。

新しい高校では人間関係を築こうとせずに、卒業までずっと1人で過ごした。

家でも両親と必要以上に会話する事はなかった。

下手すれば、一度も人と会話しない日すらあった。

何もかもがどうでもよくなっていた。

感情がなくなったように、彼女はただ同じ事を繰り返すだけの日々を送った。

そんな彼女の心を唯一支えたのは、彼の存在だけであった。

また再会できる、という根拠のない言葉が彼女にとっての希望の光だった。

だから受験だけは必死にがんばった。

彼がいる町に戻るために、受験勉強に明け暮れたのだ。

リスカは極力やらないようにした。

彼と再会した時は、傷のない姿でいたい。

そう強く言い聞かせ、カッターナイフは捨ててリスカをできないようにしたのだ。

もうすぐ念願叶って、彼に会える。

そう期待する彼女はある現実と直面し、酷く落胆する事になった。

「え……何、これ……どういう事……？」

やっと彼の家に着いた。

かと思えば、そこには何もなかった。

正確に言えば、彼の家が建っていた場所は空き地になっていた。

何故か家がなくなっていた……。

「どうして……何で、どうして……」

予想外の出来事に、動揺を隠せない彼女。

何が何だかわからず、お隣さんに事情を聞いてみる事にした。

チャイムを鳴らして、出てきた主婦であろう中年女性に「どうして隣が、空き地になってるんですか？」と震える声で尋ねた。

主婦は「ああ」と呟いた後、藪から棒にそんな事を聞いた彼女を不審がる様子もなく、他人事のようにペラペラと話し始めた。

「今から1年くらい前の事なんだけど……お隣の家ね、息子さんが亡くなったのよ」

一息子さん。

それは、蒼汰を示しているのだろう。彼女は瞬時にそう理解した。

「なんでも、頭をテーブルの角に強くぶつけて脳内出血を起こしたのが原因らしいのよ。その後は、奥さんも旦那さんも警察に捕まって、いつの間にか家が取り壊されてたのよ。まあ、事件が起こる前からお隣からはよく怒鳴り声や大きな物音が聞こえてたんだけど……今思えば、きっと息子さんは虐待されてたのね。可哀想に……」

チラリと。

主婦は彼女の方を見て、

「亡くなった息子さんは、丁度あなたと同じくらいの年齢の子だったわね……」

と言った後、再び「可哀想にねえ」と相変わらず他人事のように呟いた。

事実を知った彼女は何も言わず、走ってその場を離れた。

【彼が死んだ】

その真実は、彼女にとってあまりにも酷で、あまりにも衝撃的だった。

また会えると信じていた気持ちは無残にも打ち砕かれた。

もう、彼はいない。

どんなに願ったとしても、再会できる事は二度とないのだ。

彼女の頬には、涙が伝っていた。

涙が力なく流れ続ける。

泣きながら力なく歩く彼女を、すれ違う人は訝し気な視線を送った。

フラフラと、彼女は100円ショップに入った。

文具コーナーで迷わずカッターナイフを手に取り、レジに持っていった。

店員は涙を流す彼女に好奇の視線を送りながらも、「108円です」と事務的に言った。

支払いを済ませ、店を出た彼女は一目散にある場所に向かった。

着いた場所は、公園。

人気はなく、彼女はベンチに座った。

ここは特別な場所であった。

彼と最後に会話をした場所。あの約束を交わした場所。

彼女は目を閉じた。

ふいに、瞼に浮かんだのは、

『体だけの関係はやめて、また再会できた時……その時は、僕と正式に付き合っしてほしい』
はにかみながらそう言う彼の姿だった。

結局、この約束が叶う事も永遠に不可能となってしまったのだ。

「蒼汰くん……何で、何でっ……何で彼が死ななきゃいけなかったの!!!」

誰もいない公園で、八つ当たりするかのよう、悲痛な叫びを上げた。

乱暴に、袋からカッターを取り出した。

パッケージを開封して、すぐにカッターの刃先を出した彼女は、躊躇なく左手首を切った。

徐々に切り付けられた手首からは静かに血が溢れて流れた。

その血を見て脳裏に過ったのは……彼と過ごした時間だった。

初めて言葉を交わした日。

肉体関係を持った日。

ラブホテルに行った日。

互いに過去を語り合った日。

公園で他愛もない話をした日。

2人だけの何気ない思い出が、走馬灯のように脳裏に鮮明によみがえった。

声を殺し、彼女はひたすら泣き続けた。

こんな事なら伝えておけばよかった、と後悔していた。

『好き』

と、たった一言。

たとえ受け入れてもらえなかったとしても、伝えておけばよかった。

彼女は彼が……好きだった。

一緒に過ごして、寄り添っていくうちに、恋に落ちていたのだ。

今となってはもう、後悔しても遅過ぎる。

彼女はこれから、大切な人を失ったという重い十字架を背負って生きていかななくてはならない。

彼女はこの先、1人で生きていくのか。

彼の後を追ってしまうのか……それは誰にもわからない。

ただ1つ確かなのは、2人が再会できるのは、彼女が命を終えた時という悲しい運命だけであった。

【END】